序文

私たちがこの地上に誕生したそもそもの目的は、己の魂をまるく豊かに育て、天上界の姿を地上に顕現させることにある。すなわち、仏国土・ユートピアの建設にあるわけである。

ところが地上に誕生すると、人間はこの目的を忘却し、肉体五官に心が翻弄され、自我我欲の執着に没入して苦しみをつくり出してしまう。

肉体五官に翻弄されず、本来の神の子の自分にかえるためには、反省と瞑想による正道の生活しかあり得ない。つまり、善なる人間としての自覚の生活こそ仏国土の基礎といえる。

こうした意味において、『人間・釈迦』『心の原点』など一連の拙著を併読され、本書を通して、八正道の現実的な生かし方、自己反省の在り方、仕方をマスターし、善なる心の顕現に役立ててもらいたい。

■目次■

序文
第一章　八正道……5
八正道の精神……12
八正道の現実的活かし方……13
三法帰依……14
第二章　心と肉体……19
第三章　心の機能……27
光子体の中に＝魂・心がある……29
表面意識と潜在意識・真我……40
病気と心……42
第四章　反省の仕方と在り方……47
反省資料（その一）・図解説明……70
反省資料（その二）……82
第五章　心の機能の捉え方……117

第一章　八正道

注「心行の言魂」の八正道の部分と併読して理解を深めること。

八正道の目的は、正法の精神である慈悲の心、愛の行為、中道の心を養うことにある。

一　苦集滅道

苦＝迷い、生老病死

集＝迷いの原因、つまり五官にもとづく六根（煩悩）

滅＝六根を取り除く見方、考え方を正すこと

道＝不動の心、成道を得るための八正道

二　八正道

八正道を行ずるには、その一つ一つの目的を理解し、それにそうような努力、勇気、工夫が必要。

正見

目的＝事物の正確な判断、見解を得ることにある。

①　それにはまず、事象の一切の原因は人の想念（心・意）にあって、現われの世界は結果であることをまず理解する。

②　既成観念を白紙に戻し、事物の真実を知るようにする。

③　正見の反対は邪見であり、邪見は邪心によって生ずるので、まず心のわだかまりを除き、常に善意な第三者の立場でモノを見ることが正見の秘訣である。

それはまた、八正道の各規範の秘訣でもある。

正思

目的＝思うことは物の始まり。あらゆる現象は思うことから始まるので、他を生かす愛の思いが正思の根底。正思は八正道の中でも特に重要。

正語

目的＝思うことは言葉となる。愛の思いは愛の言葉となる。正語とは愛の言葉。心に愛があれば、言葉以前の言葉が伝わり、相手に正しく伝わるものである。

正業

目的＝①魂の修行（転生輪廻）
②地上界の調和（職業につき仕事をすることによって他を生かす）
③調和の基礎は感謝の心と奉仕の行為（人々に奉仕する）

正命

目的＝調和ある精神的、肉体的生活が目的。
それには己の長所、短所をよく見究め、カルマと化している原罪（自己保存の想念）を正す努力が必要。

正進

目的＝人間関係の調和
夫婦、親子、兄弟、友人、隣人、社会の人間関係は、愛の理念で貫かれている。

正念

目的＝念はエネルギーであり、ものをつくり出し、この地上界にあってはあらゆ

る原因の根源。

念は目的意識であり、それ故、行為を意味し、他を生かす慈悲と愛の念以外はカルマの温床になる。

邪念と対比して考えると正念の意味が一層明瞭となる。

正　定

目的＝反省によって心が安定し、やがて不動心が養われてくるが、その不動心を日常生活の中に活かせなくては正定の目的は半減する。

正定はまた、実在界とのもっとも身近な交流の場であり、正定には様々な段階があるが、要は心の調和、安定、智慧の湧現が正定の目的となる。

八正道の精神

一、中道――左右に片寄らない調和の心。

一、慈悲――生命を生かしつづける神の心。

一、愛――他を生かす、助け合い、補い合い、許す行為。

これを要約すると、一、神の心、一、正しい循環、一、慈悲と愛ということになる。

八正道の現実的活かし方

一、冷静――常に善意な第三者の立場でものを見る。（正見）

一、親切――愛の心で思い、念じ、語り、自己中心の立場を離れる。（正思、正語、正念）

一、感謝、報恩――人々の協力で社会も個人も成り立っていることを知り、奉仕と協調の心を忘れない。（正業）

一、業の修正――長所を伸ばし、短所を修正し、人々と手をとり合って生きる。（正命、正進）

一、反省――魂の前進は正法という正しい循環にあるのだから、中道の尺度で一日の言動、心の動きを反省し、想念の浄化、修正に努力をつづける。反省後の瞑想は心と肉体のバイブレーションが神に近づき、晴れ晴れとした気持になる。その気持で一日の生活を送ること。（正定）

三宝帰依

正法を信じ、行じようとする者は、三宝に帰依しなければならない。

ブッタの当時もブッタ・サンガーに帰依しようとする者は、まず三宝を依りどころとして、真に自己の確立をはかり、仏国土をめざす一員になることであった。

当時は三宝に帰依するには最低一週間の自己反省が求められ、心が堅固にして、サンガー（教団）の一員として恥じない人柄であることが条件であった。

今日のそれは当時と多少趣を異にするが、やはり、会員たるには会員としての襟度と品位を保ち、会員の名に恥じない人間であることが求められ、またそうした会員でなければ三宝という宝を自己のものとすることはできない。

こうした意味において、三宝帰依の意義をよく理解し、パラミタという偉大な心の宝庫をブッタの威光と守護・指導霊によって開発され、心の安らぎを期せられたい。

三宝帰依とは、

一、仏に帰依する

一、法に帰依する

一、僧に帰依する

の三つである。

正法はブッタの説く法を意味するが、その説かれるブッタそれ自身をまず信ずる――帰依することから始まる。なぜなれば正法はブッタの口を通して説かれるものなので、ブッタそれ自身を信じなければ、真に正法に帰依したとはいえないからである。

また、ブッタを信ずるとは、己の良心、仏心を信ずることである。善なる己のよりどころなくして自己の啓発、安らぎの境涯に至ることはむずかしい。

次の法帰依とは、ブッタの説く正法は人間としての正しい道を示したものなので、生

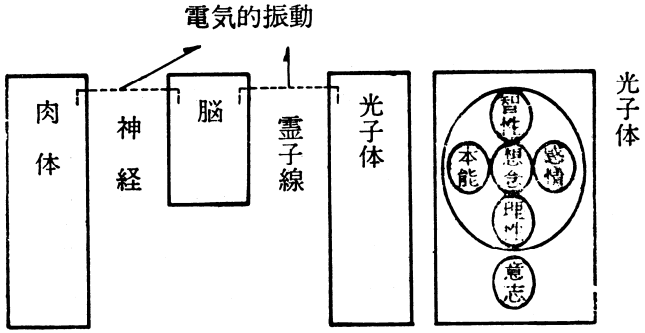
活の場にあってはその法を心のよりどころとして生活することである。法に帰依するといいながら、実生活が正道に反していれば、法を信じているとはいえない。信じたならば行為がなければならない。行為のない信仰は信仰でもなんでもない。その意味で、ブッタの説く法を実生活に活かすことが法帰依である。

最後の僧に帰依するとは、○○○の場合は会員としての襟度と品位を保ち、社会人の範となる人でなければならない。いやしくも正法を信じながら、人からあれでも○○○の会員かといわれるようでは会員たる資格を失う。少なくとも正道の実践と奉仕に生きがいを見出す神の子の自覚ある人でなければならない。さらに、ブッタの説く正法を人びとに伝え、より多くの人が正法に目覚め、ともに生きる喜びを分け与えていかなければならない。それが会員たる責任であり使命である。

こうして、三つの条件に帰依することによって、会員一人一人の自覚は高まり、神の栄光と喜びに満ちた生活を送ることができる。すなわち、三宝に帰依するとは手中に宝を握ることであり、神仏の加護と守護・指導霊の導きをうけることになるわけである。

第二章 心と肉体

注 「心行の言魂」の正定の部分と併読して理解されたい。



A 肉体

(一) 肉体は両親→神より与えられた光子体を受け入れる器、乗り舟。

光子体はあの世この世を通じての己の体であり、その光子体は永遠不滅の心という意識、魂を持って生活する。

肉体は器であり物質。肉体のみでは何一つ機能しない。光子体の中の心→神より生命エネルギーが送られることによって肉体の機能が可能になる。

(二) 神経・霊子線

イ、動物性神経（脳脊髄神経）

ロ、植物性神経（自律神経）

神経は上図のように脳を仲介として霊子線を通して光子体に結んでいる。神経が切断されると、肉体の老化が急速に進み、死に至る。

人間の死は霊子線の切断であり、肉体と光子体の分離である。

霊子線は表面意識・潜在意識・神につながっていて、霊子線を通して生命エネルギーが供給されている。

動物性神経は光子体の心の命令を伝える電気的振動の場であり、通路である。

思考にもとづく行動の一切は、すべて動物性神経の働きによる。
植物性神経は光子体の生命エネルギーの振動をうけて自律的に作動している。
植物性神経は動物性神経の支配下におかれている。
（例）恐怖や心配をいだくと胃腸の活動が弱まる。
怒りを発すると血液中の酸素が不足し病気勝ちとなる。
自己催眠による肉体の消耗（他霊の支配）

B 脳

脳は肉体と光子体を結ぶ接点、電算機。

就眠＝光子体が肉体を離れること。
脳の機能が一時停止するので、視覚・味覚・臭覚・その他の感覚機能が停止する。

C 五官と心

眼・耳・鼻・舌・身――意（心）
五官はそれ自体では機能しない。
意につながって初めて有効に機能する。
五官は現象界の環境に順応するよう創造された感覚機能であり、これなくしては五体

の保持は不可能。

問題は、この五官に意（心）が働き偽我に陥るため六根という迷いが生ずる。

五官と六根とは本来別もの。

六根とは五官に偽我が働くために起こる。

偽我→善我→真我

第三章　心の機能

注　「心行の言魂」の正定と「第五章心の機能の捉え方」を併読して理解されたい。

心の各機能の要点をあげると次の通りである。詳説は第五章を参考にされたい。

一　光子体の中に＝魂・心がある

想念―本能・感情・知性・理性・意志

想念＝想念とは心の働き

想念の調和＝八正道

想念の機能＝神から供給される生命エネルギーを媒体にして働く

想念波動＝エネルギー波動

想念＝エネルギー＝物の創造

想念が右に左に、つまり、本能に片寄り、感情に片寄ると肉体的、精神的不幸を招く。

想念は物をつくるので、丸く、豊かな、調和が必要。

想念の循環＝作用・反作用

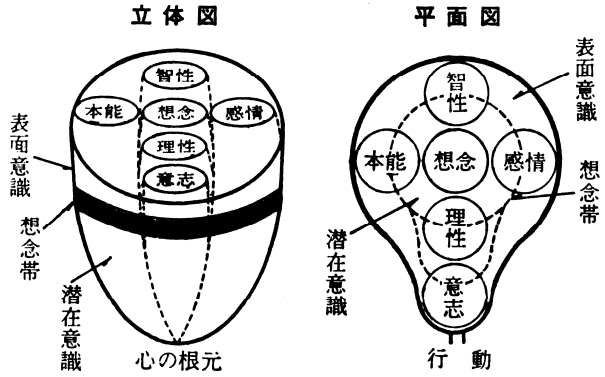
想念の集合＝類は友を呼ぶ

本能＝原始的形態―生理的欲求（食・性・眠）

本能の本来の姿は足ることを知っている。

（例）動物の生活行動。

表面意識↑↓欲望につながる。



（図解説明） 心の姿は本来丸く大きく、そして風船のように立体的なものだが、心の内部の機能を説明する場合は、上の図のようにすると理解し易い。

平面図は心を上から見た図で円の中心に想念があり、左右上下に本能、感情、智性、理性、意志がある。表面意識と潜在意識は、想念帯（点線の部分）という想念が記録された壁でさえぎられている。

表面意識と想念帯が浄化されると、想念帯の壁が崩れ、心の内部の潜在意識が表面意識に流れ出し、これまで学

んだことのない過去世の言葉や智慧が生じてくる。心の立体図をみると分かるが、心の根元部は想念をはじめとして本能、感情などの各機能が一つに集約されてしまう。

各機能は表面意識ではそれぞれちがった形で働いているが、心の中心部にくると、すべてが調和され、慈悲、愛、知慧、建設、義務、責任、使命の自覚が胎動し、神の子の己に還っている。したがって潜在意識の世界は人間と大自然の仕組みが理解されており、神の恵みを心からうけとる世界をつくっている。

宇宙即我の大我は心の根元部に表面意識がつながり、発現された姿である。

地位、名誉、財（物質）、愛欲、エゴ、逃避、拒否、闘争、建設、破壊など。

戦争＝男

平和（性の混乱）＝女

両極端に流れる。

本能的欲望は、本能を軸に感情、知性が働くので起こる。

潜在意識↔建設、調和。

本能が働くから肉体を維持し、子孫が残る。

本能は現象界の仏国土をつくる基礎である。

本能には喜びがある。その喜びを報恩に結ぶことこそ、神が与えた本能の機能。

男女の調和＝ユートピア・仏国土

感情＝行動の源泉

理屈は分かっても感情が肯定しないと人は行動に出ることは少ない。

人間の行動の七～八割は感情の働きともいえる。

表面意識↔喜怒哀楽

怒り、喜び、哀しみ、愚痴、しっと、そねみ、うらみ、中傷、恐怖など……、

自己中心的行動。

（例）立場が変わると人生観まで変わる。

利害得失で好き嫌いが生まれる。

好き嫌いで利害を越えた行動をとる。

教育者の子弟に過激な行動をとる者が多い。

潜在意識↑↓愛

感動・感激・感謝―豊かな情操・調和

他を生かす愛が働くので、こうした感情が伏在している。

喜怒哀楽もあるが、自己本位ではない。

豊かな感情想念は利害を離れて明るい社会をつくる。

感情のない世界は暗黒。

知性＝考える能力、合理性、客観性

表面意識↑↓知識、才覚、価値判断（一部）

表面意識の知性は五官という感覚を基礎にしているので、しばしば混乱の原因となる。

（例）アダムとエバがエデンの園を追われたのも知覚を得たからであり、知覚は本能、感情と結んで争いや欲望を刺激し、社会の混乱をつくって行く。

知性の働きがそのまま意志につながり行動になると冷酷となり、人間関係が冷たくなってくる。

知性は合理性を求めるが、人間関係はさまざまな魂の集団であるため、知性の単独行動は問題が非常に多くなる。

真の知者は知の限界を知る者。

知識は迷いにつながることが多い。

才覚、才能と人格は別。

増上慢は冷酷非道になりがち。

潜在意識↔知慧

智慧は感情、本能、理性、相互の作用を通して現われる。理性の働きがとくに強い。知慧には迷いがない。五官を超えて内面から湧きでてくる。

理性＝物の道理を判断する能力

理性は青年、壮年、老年の順序で発達する。

大脳の発達がまず古皮質（本能・感情）から始まり、次第に新皮質（知性・理

性）が養われてくるのと似ている。

表面意識↔経験的だけに視野が狭い

経験主義に陥ると狭い道理しか判断できない。価値判断も低くなる。

経験だけに、習慣、伝統、因習、気候、風土に左右される。このため、新しいものに対応しにくい。しかし、行動の自動調節装置の役を果たす。

潜在意識↔転生の経験

過去世で学んだことが蓄積されている。

正しい判断、次元の高い道理が判断できる。故に、もう一人の自分がこの領域に存在することになる。

意志＝志―具体的行動

意志は行動の発火点。

意志自体は受け身。

心の各機能の想念、波動によって意志の機能が点火される。

表面意識

本能の働きが意志に伝わると、愛欲、エゴ、闘争などに流れる。

感情の働きが意志に伝わると、争い、怒り、熱しやすくさめやすい、衝動的。

知性の働きが意志に伝わると、情操が失われ目的のために手段を選ばなくなる。

理性の働きが意志に伝わると、独善に流れやすい。

潜在意識―仏国土建設に対する自覚

心の各機能が相互に関連し作用し合って、理性を通して意志に伝わると本来の使命にめざめ、柔軟性を持った意志として発揮される。

二　表面意識と潜在意識・真我

表面意識―現象界（三次元）・偽我

潜在意識―実在界（四次元以降多次元）・善我―真我

表面意識と潜在意識が調和されると、善我―真我が現われ、色心不二の調和が生まれてくる。つまり現実に対する大肯定の心が生まれてくる。

表面意識

偽我・相対界・色界

潜在意識

善我・真我・統一された世界・意識界・智慧の宝庫・守護・指導霊の世界。

想念帯

現世・過去世の記録、カルマ（業）、運命のフィルム。

しかし、反省によってカルマ、運命を修正し向上をめざすことが出来る。

病気と心

肉体細胞――心・光子体

肉体細胞と光子体は互いにかみ合って生活している。

肉体の欠陥は心に影響を与え、心の曇りは肉体に強い影響を与える。

本来、光子体には曇りはない。

しかし五官に影響されて心に曇りをつくり、カルマをつくる。それがまた肉体に作用を及ぼす。

イ、心因性の病気（慢性化の傾向がある）

ロ、憑依による病気（慢性・急性にかかわらない）

ハ、弾性の限界（急性の傾向がある）

ニ、このほか遺伝体質による病気。

病気の原因は広い意味で心が原因（六根）。

肉体細胞は心の命令下におかれている。

健全な精神は健全な肉体をつくる。

(一) 病気は肉体細胞活動の弱化である。通常は肉体が自分と思っているので、死後においてもその病気で悩む。

(二) 肉体は、心の支配下にあるので、病気の場合は、反省を重ね、心を強く持ち、

肉体細胞に強く指示すると快癒が早まる。

(三) 色心不二、中道、調和。

心の自由性と肉体の不自由性。

この両者の関係を調和させるのが八正道であり、たゆまざる努力が必要。

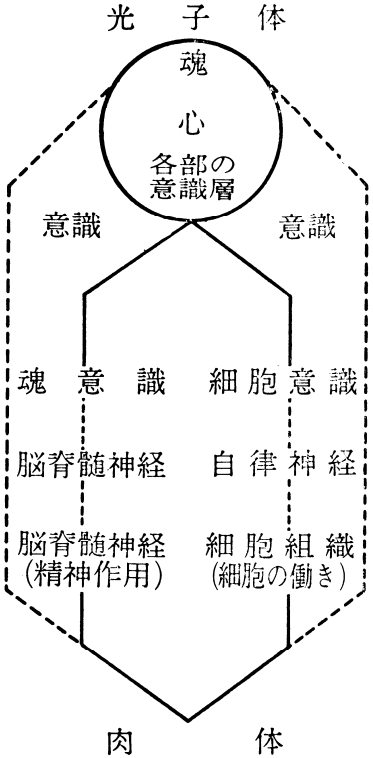
肉体は三次元
心は三次元～多次元
調和

三次元は物理的、時間、空間の制約がある。

四次元以上は時間、空間を超える。

この点を理解することによって、心と肉体の調和が果たせる。

（図解説明A） 光子体と肉体の関係を意識と神経、精神作用と細胞の働きを図示したのが左の図である。



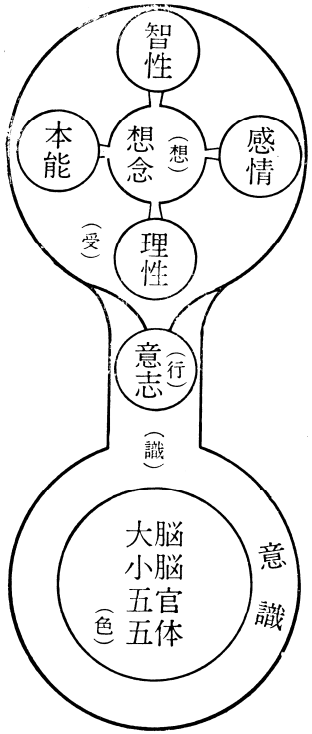
注　点線の部分が光子体と肉体の接点

ここでは霊子線については触れていないが、要は光子体と肉体というものが神経組織と密接にからみ合い光子体の働きを肉体がうけて肉体を維持しているわけである。

「心行の言魂」182頁参照。

（図解説明B） この図は心と肉体の関係を図示したものだが、主に色、受、行の形がどのようになっているかを明らかにしたものである。

通常、行動は肉体そのものが動くものとみられるが、心が意志を持たないと肉体を動かすわけにはゆかないので、意志と行動の位置は心と肉体の丁度中間におかれているわけである。



何れにせよ、これをみると肉体は単に乗り舟であり、心に包まれているということが理解できよう。

第四章（だいよんしょう）　反省（はんせい）の仕方（しかた）と在（あ）り方（かた）

基本的な態度

一、八正道の見方、考え方をよく理解しておくこと。

一、心の機能を正しく把握しておくこと。

一、反省の目的は自分の欠点を自覚し、その欠点や業に二度とふりまわされない不動の心を確立することにある。

反省の仕方と在り方、注意事項

一、自分の欠点なり、クセがどういう状況下におかれると現われるか、それを知ること

が反省の第一の手がかり。

一、欠点とかクセというものには原因がある。その原因はいつどういうふうにしてつくられたか。それには自分の過去をふりかえって見ていかないと分からない。図解説明を参照し、自分の欠点がどの年代でどういう事件を通して生じ、それがカルマとなっているかを反省する。

一、反省の場合に、ただ単に過去を追うだけでは自分の欠点、業というものが容易に思い出せないから、まず、一つ一つ自分の欠点を心において、人との関係の中でふりかえってゆくと反省しやすい。

たとえば、

両親と自分
兄弟姉妹と自分
職場と自分
恋人と自分
友人と自分

というように、人との関係、職場との関係の中で欠点をたぐって行くと、自分の欠点がどの時点で、誰と関係を持つことによって生じたかが明らかになる。

図にもあるように、短気のクセはその多くは我儘に育った家庭環境（この反対の場合もあろう）の中にその原因を見ることが出来る。短気の性情は、自分の思うようにな

らない支配欲、欲望の強さ、自己保存（エゴ）に大きな原因があったのであり、こうしたクセがあるかぎり、仕事も人との調和も持続させることはできない。

一、人の性格あるいは気質（先天性）というものはたいてい子供の頃につくられ現われる。年代が進むにしたがってそれが変化していく。だから、性格がつくられた二・三歳から七・八歳の年代に目を向けると、原因となる因子をつかむことが出来る。

一、短気の性格が我儘であったとすれば、八正道のどの規範に外れているかといえば、ほとんど全部に外れている、ということにまず気付かれよう。

現在の自分の片寄った性格、不幸の始まりは中道から外れたエゴ、足ることを知らぬ欲望にあったのだから、それを修正しなければ調和の心は得られない。

さらに、我儘の性情は両親にさまざまな迷惑をかけてきたはずである。両親の苦労は自分が子を持つ親となってハッキリと理解されてくるが、両親が自分にしてくれたことに対して、自分はどれほど両親に孝養をつくしたか。まず、大抵は両親の心配をよそに、両親の見守る中でそれが当り前として過ごしてきたにちがいない。ものに感謝ができない気持も、我儘に育った家庭環境に原因があったことも浮び上がってくる。すべてを当り前として受け取り、それが適わないと怒り出すエゴが成人してからも付いてまわっているのである。

つぎに、我儘と短気は丸い心の断面図からみるとどのようになっているか。五官に左右された想念の動きは本能と感情が異常にふくらんでいることに気付く。ものを支配

しようとする欲望は本能の第二次欲望（心の機能を参照）のふくらみを意味する。短気の想念は感情機能の異常隆起である。こうなると、円形であるはずの心は知性や理性がへこみ、みにくい形をしていることになる。心が丸くなければ人との調和は期しがたい。

また、自分自身の心も常に不安定であり、肉体的にもそれが障害となって現われてくることになる。

一、反省は大略以上のように、一つ一つの欠点を堀り下げ、人との関係において見ていくと非常にハッキリと理解されてくる。

また、今まで漠然とした自分の欠点なり業が、これを筆記してみると、より鮮明に浮

き出てくる。したがって、反省記録は各自作るようにして欲しい。

一、反省記録はいつまで残しておいてもそれは各人の自由だが、反省の中身が理解できたならば焼却するなり、捨てても差支えない。

というのは反省記録はおそらく人には見せられないものであろうし、また、本来人に見せるものではないだろう。なぜならば、反省は神と自分との関係の中でこれまでおろそかにしていた内面的な自己をみつめ、反省を通して自分自身の大いなる自覚を現実生活の調和に資するものであるからだ。

反省しているか、していないかは自分自身と神がいちばんよく知っており、またその関係の中でしか、本当は、私たちの真の前進は望めないといえる。人に見せ、私はこ

れだけ反省した、だから何もこわいものが無くなったといっても、その時はそういう気持であっても、ひと月経ち、ふた月経つうちに、また、新たな欲望が頭をもちあげ、恐怖心に襲われることだってあるのである。

それほど私たちの心は常に新しい事象に合うと、その度に揺れる可能性を持っている。生きている間はそれこそ一秒一秒が試練の中に立たされているのであり、心の深さはこれでよいという限界はないものだ。したがって、そうした場合に、その問題に立ち向う者はほかならぬ他人ではなくて自分自身である。それこそ人はどう見ようと、どう思おうと、心の問題は神と自分の関係の中でしか最終的には解決のつかないものなのである。

自分のいるところに神が存在する。
この事実を理解するならば、心の中を人に見せたところで、どうすることもできないことに気づくではないか。
反省と実践の中で前進できれば第三者はそれなりの評価をしてくれるであろうし、また評価をしてくれなくともよいのではあるまいか。人の顔色をみて反省するのではないからだ。自分自身にとって、また自分の周囲の人たちにとって、反省を通した生き方が、結局は周囲を明るくし、みんなと楽しく生活できるから、反省をするわけである。この点を間違えると、正法はうわべだけのものとなり、何かが起きると、すぐさま心に動揺が起きてこよう。

こうした意味で、反省記録は人に見せなくともよいし、見られてかえって家庭を破壊することだって起きてこよう。というのは、一家揃って正法を実践しているところはまだよいが、夫は無関心で妻だけが熱心であるという場合、その反省記録が妻の留守中に夫に見られたらどういうことになるか。事と次第によっては、調和のための記録が家庭争議の原因にもなってこよう。
この点からも、反省の結果自分の欠点の原因が分かったならば、できたら焼却した方が理想であろう。あるいは自分だけにしか分からない程度の備忘録程度にとどめておくことも一つのやり方といえるかもしれない。
一、もっとも、人によっては反省の仕方がよくのみこめず、これでいいのかどうか分から

ないという場合もあるであろう。そうした場合は、先輩や講師に相談し、自分の反省記録をみてもらっても差支えない。そうして、反省の仕方をより前進させることもよいであろう。要は、反省記録によって、これまで人には分からなかった面が明らかになって行くので、そのために相互関係があとで気まずくなるということではうまくない。そうならない相手方を選んで相談するなら相談するということにして欲しい。くりかえすようだが、反省記録は自分自身の魂の向上のためにするのである。この点を間違え、いたずらに気負った態度をとると、後悔だけが残ることになる。

一、反省の目的は、反省するというそれ自体にも大きな意義があるが、もっと大きな目的は、反省したことに二度と再びほんろうされない自分をつくる努力をすることであ

る。その努力が実践といわれるものだ。

実践していると守護霊の助けが得られる。家庭の平和や仕事について思わぬ好結果が招来され、反省についての自信もついてこよう。

もちろん、実践の過程で守護霊がさまざまなテストをしてくるので、途中で心が揺れるようなことも起きてくるが、それに負けるとスタートラインに戻ってしまう。

当初は実践すると好結果が与えられる。

次の段階では、本人の心を試すために迷いを与えるような小事件が人によってはつぎつぎと起きてくる。また、さまざまな欲望が不思議と出てくる。解決したと思った欲望がでてくる。その時に、自分の心がどう動くか、あるいは動かないか、事態を冷静

に見守れるかどうか。解決したはずの欲望が出てくるということは、その欲望がその人の業となって動いているので、原因をつかみ、自覚しても出てくるものである。原因が不明の時はすぐそれに乗ってしまうが、原因が分かっておれば冷静に対処できよう。業の活動は時が経つと静かになるので、それまでじっと待つしかない。こうして業のリンネはそれに乗ってしまうといつまでもそれにふり回されるが、乗らないで放っておくと、ついにはまったく現われなくなってくる。

こうして、一歩一歩、欠点と業の修正が実を結んでゆく。

一、実践の過程の中で、よく現実的事柄を、無理やり霊的因果関係に結びつけて考えようとしがちだが、それは間違いである。霊的因果関係は無関係ではないが、しかし霊

的問題は現実的な心の在り方によって働いていくものなので、主体はあくまで現実的な心にある。したがって、まず現実の想念の在り方を八正道に照らし、原因をつきとめる努力が大事である。

また、反省し、反省の原因がどうしても不明の時があるが、そうした場合はその問題はひとまず脇におき、つぎのテーマに取り組んで欲しい。いつまでもそれにこだわっていると、しまいには仕事も手につかず、不眠症に陥ることにもなってくる。

これでは折角の反省も執着に変ってしまい、目的から外れてしまう。反省の仕方も、一方に片寄らないことが大事であり、反省自体も中道にそうことが大切だ。

初歩的段階ではよく八正道が胸につかえてしまい、こうしちゃいけない、ああ思っ

てはまずいと、心をしばることが間々おきてくるが、これではいけない。八正道は心をしばるものではなく、心を解放するものであるのだから、胸につかえたり、思うこと、行なうことがぎこちなくなったら、まず一度、八正道を心の外に出し、心をリラックスさせることだ。そうして気持が安定したら、再び、八正道を思い、善に似たエゴに執着する意識はどこにあるのか反省し、考えてみることである。自我にしばられると心が小さくなる。八正道の目的は、善に似たエゴではない。慈悲、愛、という広い心である。罪をにくんで人は憎まずという心根である。八正道に心がしばられるのは自我欲望に執着するからだ。したがって、これは善だと思いながら執着にしばられてはならない。慈悲と愛は、そうした執着を超えたところにあるのである。

一、反省の追究は、ややもすると精神分析、児童心理学のそれのようになる人がある。あるいは過去の歴史的環境を知るために歴史を勉強する人もいるようだ。こうなると正法の反省は学問に流れてくる。才能のある人や頭のいい人ならそれもいいだろうが、本も読めない、多忙な人はどうなるのか、老人などはこれでは救われまい。

正法の反省、八正道の目的は要約すると、大宇宙を支配する慈悲の心に自分を高め、愛の行為ができる自分をつくり上げることである。別な言葉でいえば、反省と実践は感謝と報恩のめざめにあるわけである。自分の性格、心をこと細かに分析して、人の心はこうだ、ああだといったところで、どこに意義があるのか。本末を間違えてはいけない。生かされている事実を理解し、人びとに報恩の行為が心に抵抗もなく、素直

に、やれることが正法の目的である。
この点を間違え、心理学や歴史を調べるようになっていったら、正法は、再び、哲学、学問になって行くだろう。
この点を十分認識し、あせらず、怠らず、一歩一歩前に進むようにして欲しい。
一、反省後の瞑想は心が非常に整うものである。この時、守護霊とも通じやすくなるので、心の中で祈願文を唱え、瞑想をつづけていると、守護霊の波動と一致し、非常に気持のよい気分になる。人によっては見えない世界が見えてくる。が、見えなくてもよい。瞑想の目的は三昧という神仏の心に触れることにあるが、そうした静かな心で日常生活が送れるようになることが、もっとも大事なことである。

瞑想している時は気分がよく、目を開けている時は修羅と変らないようでは、反省、正定の目的は果たされていないことになる。
一、くりかえしていうが反省の目的は心の曇りを晴らすことである。つまり心のアカを自覚することにある。アカが分かってもすぐには取れまい。取れたかどうかは反省後の実生活でそのアカにふりまわされない自分になれたかどうか、実践の過程の中で証明されて行くものだ。そうして、やがてそのアカから離れ、調和の自分がつくり出される。反省は実生活の調和のための手段であることを忘れないことだ。
一、反省しても反省したのかどうかよく分からないという人に出会うが、こういう人は単に思い出を追想しているのにすぎないといえる。

八正道を規準に、人と自分との関係の中で自分の欠点をみていくと、自分がいかに自己保存の中で生きてきたかが分かる。そうして、その原因に突き当ると、深いザンゲの心になってくるものである。ザンゲの心を裏返すと、生かされている感謝の心が息づいているものだ。すなわち、ザンゲの心は人びとに奉仕せずにはいられない気持に移ってゆく。奉仕の心が湧いてくれば、家庭も仕事もうまくゆくはずである。現在、うまくいっているとすれば、こんどは他にそれを及ぼして行くべきだ。仕合わせを独り占めしているうちは、正法からはるかに離れた存在である。

思い出を追想しているうちは、ダメである。それは反省でもなんでもないからだ。

一、反省する場合の姿勢なり、形は問わない。また、過去を反省するには、やはり、瞑

目して静かにふりかえる時間、場所、正座、あるいは机に向かう機会を持つと容易にできるだろう。しかし、環境や仕事の都合でそれができない場合は、工夫をしてやって欲しい。

一、反省の禅定に入る前に、まず丸い心を心の中に描いて欲しい。想念はモノをつくるので、太陽のような広く大きく、あらゆる生命を生かす生命体を心に想像することだ。そうして次ぎに、静かに自分の欠点と人との関係の中で反省をして行くと、丸い心のどこにゆがみがあるかが分かってくる。こうして欠点の原因が分かったあと、再び丸く豊かな心を心の中に想像し瞑想する場合は瞑想をして欲しい。

一、瞑想は反省をしたあとにやって欲しい。反省を抜きにして瞑想に直進すると、また

そうした習慣がついてしまうと、心のゆがみを持ったままで心の空白をうながし、そうした場合に悪霊に憑依されることになってくる。必ず反省をし、そのあとで瞑想するようにして欲しい。その場合、前記のように丸い心を心の中に描き、祈願文を静かに唱えることを忘れないで欲しい。祈願文を唱えると、心が大宇宙大神霊、守護・指導霊に直結するようになり、さまざまな雑念から離れることができると同時に、魔の支配からもさけることが可能になってくる。こうして瞑想をつづけるようにすると瞑想時の平和な心が次第に明らかとなり、やがて、守護霊と交流がスムーズにできるようになってくる。

反省資料（その一）・図解説明

（図解説明） 71・72頁

図の意味は、人の性格を我儘、我慢という二つの両極端に分け、この二つの性格が成長するにしたがって、どのように変化して行くかをみたものである。

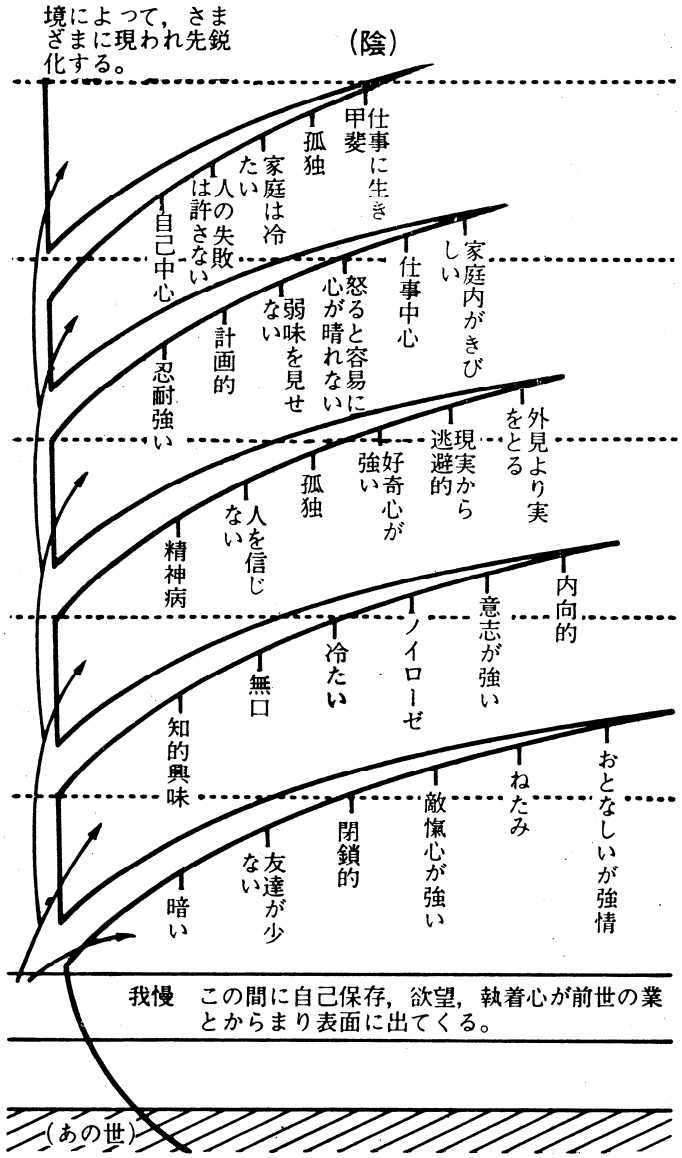
もちろん、この図は二つに分けるとこうなるというもので、人によっては、子供の時は両親がきびしく家も豊かでなかったが、二十代をすぎる頃から環境が大きく変わって、性格的にも明るく、我儘の気質に近い性格をつくり上げている者もあるのであり、また、

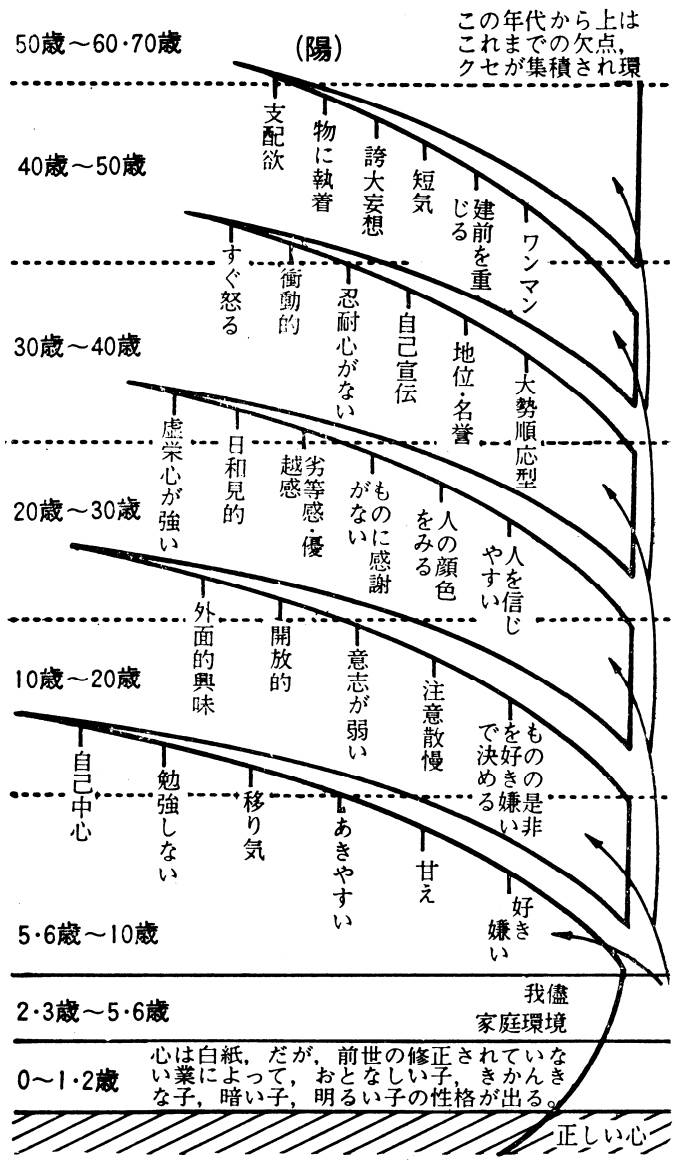
反対の場合もあるわけである。このため、この図は一つの例であって、すべてこれに当てはまるというものではない。ただ子供の時の環境によって、つくり上げられた一つの気質が年代が進むにしたがって、どう変化し、四十代、五十代になると自分の欠点、悪い性格というものが、どの時点でどう発生したかを、見るのに便利であると思う。

まず、図を見て欲しい。

土の中にかくれた大木の根を、あの世とみるわけである。ここは正しい調和された心の世界である。

次に、産ぶ声をあげて〇歳から一、二歳ぐらいまではまだ、自我（エゴ）の意識はほとんどないものである。あるのは守護霊の波動だけである。つまり、祝福と人生の水先





案内をつとめる守護霊の安らぎの波動が、誕生したばかりの子供を守ってくれている時代である。しかし、この頃の子供は、皆同じかというとそうではなく、前世のまだ修正されない業（気質として残っている）の波動が残っており、おとなしい嬰児もあれば、泣いてばかりいて比較的気の強い性格の子もあれば、何となく暗い感じがする、あるいは、明るい感じがする、というものが出てきている。

その前世の業が、二歳から五、六歳にかけると、家庭環境と、ミックスされて、図のように我儘な子供になったり、我慢を強いられる子供ができ上がったりする。

したがって、この年代で、自我の意識・性格がつくられてゆく。

つまり、自己保存、欲望、ものに執着する心、それにこれらとミックスされた前世の

業がハッキリと表面に出てくるわけである。

自分の性格が先天的か、後天的かを見分けることは、普通では容易でないが、この年代につくり上げられた性格は、前世の業（先天的）が多分に含まれていると見て、これの修正に努力すべきである。

さて、ホイホイ育てられ、我儘になった性格は、成長するにしたがい、どう変化して行くか。図の左側をみると分かるように、五、六歳から十歳にかけては、好き嫌いの感情が激しくなる、人にすぐ甘える、物にあきやすい、移り気である、勉強をあまりしたがらない、自己中心的である。

つづいて、十歳から二十歳にかけて、どうかとみると、物事の良非を自分の好みで決

めてしまう。注意力が散漫、意志が弱い、人柄はいたって開放的だが、外にばかり興味を示し、直情傾向となる。

二十代から三十代にかけては、人をすぐ信じたり、人の顔色をみる。ものに感謝することがなく、劣等感や優越感にすぐひたる。人によっては日和見的になり、それでいて虚栄心は強くなる

三十代から四十代にかけては、意見はいうが、多勢の意見にしたがう。あっても、妥協する傾向を帯びる。地位、名誉に執着を示す。自己宣伝をしたがる、忍耐力はあまりなく物事が衝動的で、人と話がくい違うとすぐ怒りだす。しかしまた、もとに収まるのも速い。

四十代から五十代になると、うまく仕事が順調にいった者はワンマンになりやすく、短気となる。そうして建前を重んじ、物に執着する心が強くなる。人によっては誇大妄想になる者もおり、あるいは、要領よく立回る人も出てくる。

五十代から七十代にかけては、各年代別に出てきた性格が折にふれて現われ、もっとも強く心に根ざした性格が七十代あたりになると表面化し、子供と衝突したり、孤独に陥る者も出てくる。

以上簡単に説明したが、年代別の性格は、これも一つの例であって、人によってはこれらのクセが相前後する者もあるわけであり必ずしも一定ではない。

要は、我儘に育ったという一つの事実によって、このようなさまざまな性格が各年代

によって発生し、その人の業、欠点をつくり上げて行くというものである。

一方、家庭環境が、経済的にきびしく、両親の冷たい家庭で育つと、自然と忍耐我慢が強いられ、友達がうらやましく、このため十歳頃までに、暗い、閉鎖的な性格をつくり上げてゆく。友達が少なく、敵愾心ばかり強くなり、ねたみ、うらみの想念が心を支配してくる。外見はおとなしいが中身は強情である。

十代から二十代になると、なんとか世に立ちたい、友達を見返してやりたい、という気が強いから勉強は人一倍やる。人が遊んでいる時も机に向かうことが多いから、自然と無口になり、冷たい人柄になってゆく。人によっては、この年代にノイローゼにかかる者も出てくる。しかし、環境にうち勝つために意志は強くなり、内向的性格が一段と

表面に出てくる。

二十代から三十代になると、人によっては、精神分裂症になり苦しむ。暗い子供時代をすごしてきたから、どうしても人を信じない、話もあまりしないから孤独になる。物事は控え目だが、好奇心が強く、その好奇心によって、かろうじて心の安定が図られている者もいる。人と協同して何かをするという気持が少ないから、職業も個人の能力が伸ばせるものを選びたがる。また、物事が逃避的傾向となる。しかし、いい面といえば外見よりも実をとる方向になる。

三十代から四十代にかけては、たいていの困難にぶつかっても、忍耐強く、しかも、もともと内向的性格だから計画性に富んでいる。仕事中心主義で家庭にあっては厳しい

父親、あるいは冷たい母親ができ上がる。もともと強情な性格なので、怒り出すと周囲の人も驚くほどの強さでどなり、絶対に後に下がらない。

四十代、五十代になると、自己中心の傾向がいよいよ強く、人と妥協することが少なく、人の失敗は許さない。家庭は冷たく、いつも孤独である。人と談笑しても心の底から笑うということが少なく、男の場合は、生きがいは仕事だけとなる。

こうして六十代、七十代となり、我慢の性格が一生ついてまわると、子供は自然と離れ、晩年は子供の時の暗い環境に似た心境で終えることになる。

さて、こうみると、我儘は陽性のエゴともいえるし、我慢は陰性のエゴといえよう。人はそれぞれこの両方の性格を合わせ持ち、失敗と成功、失意と希望の人生の中でその

性格をつくり上げて行くもので、冒頭にふれたように、一方に片寄っているという人は少ない。

ただ、子供の時につくられた性格が根底にあるので、どちらかに濃い性格を持って生活しているものである。

したがって、現在の欠点が、どの年代でどう大きくふくらんだか、また、子供の時は泣き虫だったか、人の物をよく欲しがったか、両親を困らせたか、を見てゆくと、自分のエゴが陽性か陰性かがハッキリ把握でき、自分の欠点なり、業というものを修正するのに大いに役立つであろうと思う。

反省資料（その二）

注①この中で自分の欠点、業に関係する事項をチェックするここに挙げた以外のものについてもまだまだあるはずだから、それを書き加えて反省の資料とされたい。

②ここに挙げた項目は何れも八正道のどの項目にも相反するものばかりである。

子供の時代と、親と自分

一、人の物が欲しくてよく母親を困らせた。
二、弟ばかり可愛がる父親が憎かった。
三、姉がよくいじわるするのでケンカばかりしていた。
四、友達からいじわるされると無性に腹が立ちケンカをした。
五、メンコ遊びに夢中になり、勉強などしたことがなかった。
六、友達が遊んでくれないので家の中で絵本ばかり読んでいた。
七、予習、復習をしないで遊んでばかりいたので学校の先生に指名されるのがこわく

て、教室ではいつも小さくなっていた。
八、人に負けるのがシャクなので人一倍勉強し、いい点を取ることに夢中だった。
九、勉強が出来ない子をいつも見下していた。
一〇、両親からほめられるより学校の先生にほめられた方がずっとうれしかった。
一一、学校での出来ごとは、家では決して話したことがなかった。
一二、体が弱かったので友達と遊ぶことができず、みんながうらやましかった。
一三、友達同士の間では自分が常にガキ大将でないと気分がおさまらなかった。
一四、人からほめられることを願い、行動していた。
一五、友達の前では知らないことでも知ったかぶりをした。

一六、友達を悪い遊びに誘った。
一七、友達から悪い遊びに誘われ、本当はいけないと思いながらもそれに乗じた。
一八、正しい忠告をしてくれた友達に対して素直になれなかった。
一九、友達の悪口や陰口を言った。
二〇、友達の心を傷つけるようなことを平気で言った。
二一、大げさな事を平気で言う、自己顕示欲が強かった。
二二、友達に自分の考えを押しつけた。
二三、友達に暴力をふるった。
二四、学校の備品や建物を故意に破損した。

二五、学校の先生に対して一方的な批判をした。
二六、勉強が嫌いなので早く大人になりたいと思いつづけた。
二七、弟とオモチャやお菓子の奪い合いを度々やり、弟を泣かせてばかりいた。
二八、泣いて訴えれば母親はなんでもきいてくれるものと思い、よく泣いた。
二九、学校の先生は両親よりも恐かった。だから教室ではいつも小さくなっていた。
三〇、勉強するより遊んでいる方が好きだった。
三一、遊んでいるより勉強をしている方が好きだった。
三二、近所に自分をいじめる子がいたので、みんなと遊ぶ時はいつも小さくなっていた。
三三、いつも好きな子と遊び、嫌いな子がくると仲間外れにした。

三四、家に帰ると勉強しろといわれるので、学校が終っても夜おそくまで友達と遊び、それから家に帰った。

三五、母親は私のいうことならなんでも聞いてくれた。だからいつも甘えた。

三六、母親はいつも愚痴ばかりこぼしていた。母親が可哀想で父親が憎かった。

三七、母親のいうことなら一〇〇パーセント信じた。

三八、父親は怒りっぽく、こわかった。

三九、父親をみると闘争心が湧いてくる。

四〇、学校から家に帰っても母親がいない。だから家に帰っても淋しくて友達がうらやましかった。

四一、両親がケンカをすると、いつも母親に味方した。

四二、父親は家にいると威張ってばかりいて、酒ばかり飲んでいる。早く死んでくれればいいと思いつづけた。

四三、父親の前では自由に話ができなかった。

四四、両親は私のことならなんでもいうことをきいてくれた。だから私は知らぬ間に我儘になっていた。

四五、年中口論する両親に孝養する気がどうしても起きてこなかった。

四六、両親の欠点が目についてどうしても自分の親とは思えなかった。

四七、両親がいると邪魔なので早く死んで欲しいと願った。

四八、両親は一つとして私の意見をきいてくれなかった。だから両親が憎かった。

四九、親の真似はしたくないと思いつづけた。

五〇、親が子供の面倒を見るのは当然であり、子供は親を扶養する義務はないと思った。

五一、母親は神経質でいつも私に干渉した。うるさい母親と思った。

五二、友達の家庭がうらやましく、かなしい思いにいつも心が揺れた。

五三、仕事、仕事で外にいる父親の顔をみたことがないので、父親が他人のように思えて仕方がなかった。

五四、母親の意見が正しく、父親の意見は正しくないといつも思っていた。

五五、貧乏な家庭に育った私は大きくなったら金持ちになり親戚を見返してやると敵愾心に燃えつづけた。

五六、なんでも自由になったので、人を見下すクセがついてしまった。

子供と自分（親の立場から）

一、子供の養育は妻の責任と考え、すべてまかせっ放しだった。

二、子供が我儘なのは妻のせいと考えていた。

三、子供の体が弱いのは妻の責任と思っていた。

四、子供の勉強が気になって仕方がない。自分が社会に出て苦労したので子供だけはいい学校に入れてやりたいと願っていた。

五、子供の前ではたいていウソをついてしまう。
六、子供はきびしくしつけるものだ。
七、おとなしい子供に好意を持ってしまう。
八、自分のいうことをきかない子供が憎くて仕方がない。
九、子供が泣かされてくるとカッとなり、相手の家にどなりこんでいってしまう。
一〇、子供のためならなんでもしてやる。
一一、子供を叱る時は他人と比較して叱ってしまう。
一二、我が子でも好きな子供と嫌いな子供がある。
一三、子供の学校での成績が気になり、成績がよいと安心し、悪いと不安になる。

一四、私はこうして勉強したといって子供に勉強を強要する。
一五、子供の成績がよかろうと悪かろうと、気にならない。人生はなるようにしかならないとあきらめているから・・・・・。
一六、ＰＴＡに一度も出たことがない。
一七、子供の教育、しつけは学校に一任しておけばよい。
一八、子供の前でも平気で夫婦ゲンカをする。
一九、自分の人生観を子供にも分かって欲しいと願い、自分の意見を執拗にきかせ、自分の枠に子供を引き入れる。
二〇、我が子だけは安心といった子煩悩。

夫婦・男女問題

一、愛情は肉体関係が主であると考える。
二、夫の浮気は許せない。
三、夫婦はケンカする度に密度を増すものと考える。
四、掃除も満足にできない妻にいつも悩む。
五、家に帰ってくるまで夫が心配で苦しんでしまう。
六、なにをしてもありがとうといわない夫が憎くて仕方がない。
七、仕事に夢中な夫は私を少しもかまってくれない。

八、気のやさしい夫より、暴力をふるってもたくましい男が好きだ。
九、女は弱い、だから夫は妻の心を満足させてくれる人であって欲しい。
一〇、夫は外で適当にうまいことをやっている。家庭に閉じこめられた私は不満でたまらない。
一一、体力では男に負けるから男に勝つには口でいいまかすしかない。
一二、一日話をしないと胸のあたりがムカムカしてくる。
一三、夫の自由にならない妻は妻ではない。
一四、女は黙って男についていけばよい。
一五、夫が正法を知ってくれれば、自分の思う通りになってくれると思うので、なんと

か夫に正法を知ってもらいたいと悩んでしまう。

一六、経済的能力のある男だけが夫たる資格者だ。

一七、私さえ我慢すればといつも悩みつづける。

一八、私ほど不幸な者はいないといつも被害者意識に襲われる。

一九、夫の単純さを見て男はみんなこんなものと思いこんでいる。

二〇、妻の顔をみるのがいやでいやで仕方がない。

二一、夫に何かいわれると弁解しないと気が済まない。

二二、夫の賭け事に悩むが夫の言葉に負けてついダラダラと苦しい生活をつづけている。

二三、夫が社会でどんなことをしていようとも、私にやさしい夫を傷つける者は誰であ

ろうと憎んでしまう。

二四、家庭こそ女の仕合せと考える。

二五、女は子供と同じで、時には体罰を加えないということをきかない。

二六、好きな男性をみると頼りたくなる。

二七、相手が女性だと警戒心が自然と出てくる。

二八、地位の高い男性をみると憧れてしまう。

二九、好きな女性を見ると行動的になる。

三〇、女であれば誰彼の区別なく愛したくなる。

三一、男性の前に出ると思うように話ができない。

三二、女性の前に出ると思うように話が出来ない。
三三、男性の前だといいたいこともいえるが、女性同志だと遠慮しがちになる。
三四、相手が女性だと平気で金が使える。
三五、女性をみると自然に想像が働いてしまう。
三六、女性をみるとつい騙したくなる。
三七、肉体的目的以外には女性を必要としない。
三八、女性をみると軽べつしたくなる。
三九、女の幸福は男次第と思っている、なぜ……。
四〇、好きな男性が他の女性と親しく話をしているとたまらなく嫉妬心が湧いてくる。

四一、精神的な思いやりだけが愛だと考えている。
四二、女性の関心を得るには金が一番早いと考えている。
四三、金を儲けることは好きな女性を独占したいからだ。
四四、女性の前ではウソをつくことにかぎる。
四五、男性の前では出来るだけいいところを見せる。
四六、朝と晩では思うこと考えることがまるでちがっている。
四七、気のやさしい女性よりも容姿の美しい女性に気がひかれる。

職場と自分

一、同僚が仕事に追われ、困っていても、自分の仕事だけをやっていればよい。
二、出世のためには同僚の陰口を出来るだけ多く話してしまう。
三、同僚や後輩に先を越されたくないといつも思いつづけ仕事に夢中になってきた。
四、一流企業に身を置く友人がうらやましく、仕事に熱が入らない。
五、学歴が気になって仕方がない。
六、学歴のない人を見るとどうしても見下してしまう。
七、趣味と職業が一致したらどんなに幸福かと思い悩む。
八、自分の能力は何かと、いつもあたりを見回し、仕事に熱が入らない。
九、自分は学歴がないから人の二倍も働いて上司から認められたいと願っていた。

一〇、上司の前に出ると自分の思っていることの半分も説明できない。
一一、学歴と能力不足からいつも劣等感に悩みつづけた。
一二、自分の思うようにならない部下を見ると、ついガミガミいってしまう。
一三、今日為そうと心がけてもどうしても明日に持ち越してしまう。
一四、人と協同して仕事をするのは苦手だ。
一五、会社の同僚には決して自分の胸のうちをあかしたことがない。
一六、職場にたいする不満が絶えない。
一七、自分はいつも貧乏クジを引き、人のいやがる仕事を引き受けていると思う。
一八、生活のためにいやな職場でも我慢するより仕方がない。

一九、口は災いのもとだからあまり語らないことにしている。
二〇、計画をたてても思う通りにゆかない。だから思いつきで仕事をする。
二一、仕事は出来るだけ要領よくやることにしている。
二二、人の欠点が目について仕方がない。
二三、人の上にどうしても立ちたい。
二四、人に使われているのが堪え難い。
二五、友人が失敗すると胸がスーッとする。
二六、仕事に熱中するがすぐさめてしまう。
二七、仕事をしているとほかの人が全然目に入らない。

二八、人との競争意識からどうしても抜けきれない。
二九、自尊心からなかなか抜けきれない。
三〇、自分はたいていのことはこなせるのですぐ自信過剰に陥る。
三一、理屈で相手をいい負かすクセがある。
三二、怒りで相手を黙らせるクセがある。
三三、友人が困っていると見ていられない。このためつい上司と衝突してしまう。
三四、失敗しても相手が女性だと寛容になる。
三五、仕事の鬼といわれると気分がよい。
三六、肩書がいつも気になる。

三七、自分の真面目さを人にも求める。

三八、こうすれば会社の利益になると思っても自分の利益につながらないとやる気が起きない。

三九、職場では恐怖心が人一倍強い。

四〇、職場ではどういうわけか虚栄を張ってしまう。

四一、相手が上司だと、考えもせずすぐ信じてしまう。

四二、後輩の献策が会社の利益につながると考えても、相手によっては黙殺してしまう。

四三、人の後にいて眺めている方が安心できる。

四四、上司のいるときには仕事をし、いないときには仕事をなまけてしまう。

四五、上司に注意されるとつい言い訳をしてしまう。

四六、人の顔色をみて話をする。

四七、どういうわけか独り合点になりがちである。

四八、同僚や上司の噂に興味を持つ。

四九、弁舌に自信があるのでつい多弁になってしまう。

五〇、自分の知識をひけらかしてしまう。

五一、自己満足に陥りがち。

五二、上司にことわりもなく独断専行してしまう。

五三、自分さえ我慢すれば平和であると思っている。

五四、行動と考えがいつもちがっている。
五五、人と議論するのが好きだ。
五六、不用意な発言が多くいつも悔いてしまう。
五七、特定な人にのみ好意をもつ。
五八、一度いい出したら間違っていても直さない。
五九、自分の弱味は上司でも同僚でも見せたことがない。
六〇、失敗しても頬かぶりしてしまう。
六一、職場ではいつも活気に満ちたふりをしている。
六二、ほめられるとうれしく、けなされると相手が憎くなる。

六三、交際の範囲が利害打算にかぎっている。
六四、公的の場にも私情が入ってしまう。

自分の欠点をつくっている考え方、性格

一、働くことに興味が持てない。
二、人をすぐ信じてしまい、あとで後悔をする。
三、すぐ人を責めてしまう。
四、消極的、否定的、悲観的発言が多い。
五、悪いことをしたと思っても、子供や妻の前では謝れない。

六、人の仕合せがねたましい。
七、自分に甘く、相手にきびしい。
八、心配や後悔につい多くの時間をかけてしまう。
九、自分の立場を守るためにはウソをついても正当だと思っている。
一〇、思い通りにならないとイライラする。
一一、家庭で妻や子供と話し合うことが少ない。
一二、金のためなら人を誤魔化しても構わない。人も誤魔化していると思うから。
一三、世の中が悪のかたまりのように見えて仕方がない。
一四、商売で金を儲けるためには人を騙しても平気。

一五、地位や名誉が気になって仕方がない。
一六、金銭欲からどうしても離れられない。
一七、個人の金銭欲が世の中を動かしている。
一八、貧乏はやはり悪だ。
一九、親子でも夫婦でも金だけは別だ。
二〇、物事はすべて金で解決される。
二一、身内にはきびしいが他人だと寛容になってしまう。
二二、他人にはきびしいが身内には寛容になってしまう。
二三、変わった洋服を見るとすぐ買いたくなる。

二四、ボロを着ていても少しも気にならない。
二五、自分が考えるより他人に考えてもらった方が楽だし、間違いがない。
二六、人の話はまず疑ってかかることにしている。
二七、人前に出ると自分を意識し飾ってしまう。
二八、人前に出ると悪ぶるクセがある。
二九、人前に出ると話が出来ない。
三〇、人前に出ると遠慮してしまう。
三一、人前に出ると自己主張が強くなる。
三二、人前に出ると話さなくてもよいことまで話してしまう。

三三、人を差別して見てしまう。
三四、物事をすぐ忘れる。
三五、物事を好き嫌いで割り切る。
三六、人はよく頑固だというが、自分ではそうは思わないのだが……。
三七、いいことでもなかなか行動に出ない。
三八、物事は理屈が立たないと割り切れない。
三九、人の話を横取りして話を独占してしまう。
四〇、人の話を真面目にきいているふりをして腹の中で笑ってしまうクセがある。
四一、経済的観念が乏しい。

四二、一人でいると空想にふけってしまう。
四三、人のあげ足を取り得意になるクセがある。
四四、霊的な関心がどういうわけか人一倍強い。
四五、現実的事柄の解決に霊的因果関係を結びつけて解決しようとするクセがある。
四六、さいぎ心が強い。
四七、人の話がどうも素直にきけない。
四八、好き嫌いの感情で意志を決めてしまう。
四九、酒にどうしてものまれてしまう。
五〇、人に騙されやすい。

五一、使えるものでもすぐ捨ててしまうクセがある。
五二、人の悩みよりも自分の悩みに追われてしまう。
五三、物事に執念を燃やす。
五四、自分の弱味に関係ある話題が出ると、たまらない屈辱感に襲われる。
五五、人は人、自分は自分という考えになり、自己満足に陥る。
五六、自分はダメとすぐあきらめる。
五七、一度こうと思い込むと、その考えからなかなか離れられない。
五八、物事に決心が容易につかない。
五九、つらい悲しいことはいつまでも心から離れない。

六〇、情につい流されてしまう。

六一、大勢の中だと自分はこう思うと考えても、その考えを発表することができず、多勢に押し流されてしまう。

六二、人に命令するより命令されているほうが楽でたのしい。

六三、自分の意志にさからう者はいつまでも頭から離れない。

六四、自分のすることは常に正しいと思い込んでしまう。

六五、地位を求めてあくせくしている者をみると、世の中にはどうしてこんなにバカが多いのかとおかしくなる。

六六、家に帰るとやっと自分に戻る。

六七、欲望がなければ世の中は進歩しないと考えている。

六八、欲望がなければ生活ができないと思っている。

六九、社会全体よりも家庭の平和を望む。

七〇、人におだてられるとつい乗ってしまう。

七一、人から悪口をいわれるとすぐカッとなる。

七二、一度決心しても、人の話でちょいちょいその決心が変わる。

七三、常に新しいものに気を奪われる。

七四、遠い未来よりも現実の目先のことに心を奪われる。

七五、理屈で理解できないことは認めないことにしている。

七六、他人が困っていても知らないふりをしてしまう。

七七、金のない者、地位の低い者の近くには寄らないことにしている。

七八、本を読むより話をきく方が楽だ。

第五章　心の機能の捉え方

注　第三章の「心の機能」の具体的説明がこの資料である。
それ故反省の一資料として欲しい。
また「心行の言魂」の正定を参照されたい。

八正道の「正定」――反省は、どのようにして行なうか。反省の目的、仕方について、詳説してみたい。

まず、反省の目的――。

反省とは、止観である。想念をとめ、過去をふりかえり、自分がなした行為、想念をあらためて、みつめる。そうして、その想念行為をみつめた結果、その想念行為が八つの規範である八正道に、適っていたかどうか。もし、適っていなければ、その原因を追究し、原因、結果の正体を見極める。そうして、その正体がわかったならば、二度と再び、その原因に翻弄されない想念と行為、八正道に適った生活を、実践してゆくことである。

次に、心について、ふれてみる。

心の姿については、これまで『心の原点』などの拙著のなかで述べてきたので、重複するところもあるが、想念を中心とした五つの精神構造（理性、知性、感情、本能、意志）について、述べてみたいと思う。

心の姿は、太陽が、地球が、金星がまるいように、円型をなしている。また、太陽を中心とした九つの惑星、三十二の衛星についても、それぞれ円運動を描いて、それぞれの生命活動を行なっている。素粒子の世界でも、核を中心として、陰外電子が円運動を行なっている。大宇宙も円型である。現代科学は、まだそこまで証明する手がかりを得ていないが、円型である。やがて、その事実が、証明される時がくるであろう。

円型である心の姿が、円型として保たれている場合は、もっとも強烈に、その生命活動が行なわれる。なぜかというと、円の姿は、神の姿であるからである。眼に見える私たちの五体の姿は、決してまるくはない。ところが、五体の背後にある後光は、まるいのである。仏像、仏画の後光をみればわかるように、私たちの心の姿は、意識は、後光という姿となって、この五体を維持し、動かしているのである。同時に、日々の私たちの心の所在が、後光に反映する。五体の姿は、この現象世界に、適応し得るようにつくられているにすぎない。大宇宙がまるく、太陽がまるく、人間の心もまるい。この世の一切のものは、神の創作であり、したがって、まるいということは、神の意思に適ったものであり、心の姿は、当然、神の子の姿を現わしていることになるわけである。

また円型物は、凹凸のあるものからみれば、もっとも抵抗が少ない。そうして、もっとも容積が充足される。

心の姿は、円型になってはじめて、その本領を発揮することができるわけだ。

では、その心について、円型であるべきはずのその心が、いびつになったり、三角になったり、四角になった原因は何か、すなわち、八正道から離れた原因は何か、不幸の原因は何か、それを追究してゆくのが、反省である。反省にはいる前に、若干の説明を加えてみたいと思う。

心の姿についてコマにたとえてみることにしよう。コマは、その中心から円周に至る半径の各部分は、相等しく、均等に円が描かれていると運動エネルギーが完全に消滅す

るまでまわり続ける。ところが、その円周の一部が欠けたり、でっぱっていたり、あるいは円周自体が円周でなく、三角であったり、四角であると、空気抵抗が強くなって運動エネルギーに等しい回転数を発揮することができない。人間の心もこれと同じように、知性の部分がへこみ、本能の分野が出たりすると、コマの回転（心の在り方）が十分にゆかず、意志を通した行為もちぐはぐとなり、心と行為はバランスを失い、悪い病気にかかったり、粗野な人間ができ上がることになる。心と行為が、いうなればコマがコマとして、その効用を完全に果たすためには、凹凸のない円型をした形がもっとも理想であり、また、人間の心というものは、本来そのように、できているものである。それが、長い転生輪廻の過程において、円型であるべき心の姿が、三角、四角、六角あるいはいびつになってしまい、本来の機能を果たすことができなくなってしまっているのである。

もっとも、あの世からこの世に出生するおりには、あの世で千年、二千年と訓練をうけているから、心の姿も、前生時代のいびつを修正しているが、しかしそれでも、完全に修正しきってはいない。修正しきっていないから、この世の修行の目的があるのであり、原罪という人間の自我とカルマが、私たち人間についてまわっているわけである。

もう一つは、同じ円型でも、大きくわけて、大、中、小に区分できる。太陽のような大きな球体もあれば、太陽と比較すればずっと小さい地球という球体もある。したがって、同じ球体、円型にしても、大小のそれがあるし、その段階も、無限にある。前生で容積五の球体にした人は、今生では六の球体にすべく修行の目的で生まれる。六の人は

七に。したがって、これでよしとする限度はないのである。こういうと、人間とは、なんて因果な生物なのであろうと思う人があるかも知れない。この人生は楽少なく、苦労が多いというのが、大部分の人の感慨だろうと思う。そうして、出来得るならば二度と人間稼業はしたくないと思っておられるだろう。

ところが九〇％の各人の意識は、転生輪廻に大きな生きがいと喜びと、人間としての誇りをもっていることを知ってもらいたいと思う。

以上、心の姿の概要を述べたので、今度は心の内部にある想念をはじめとした理性、知性などの五つの機能とその構造について述べてみることにする。

想念

想念は、円である心の中心部に位置している。ふつう想念というと、さまざまな想像、空想、雑念、正念など、いろいろな想いを指していう。したがって想念と一口にいっても、その想念の概念をとらえることは非常にむずかしいものである。そこで、ここでいう想念とは、理性、本能、知性、感情、意志にまで発展する以前の、エネルギー活動の場としてとらえるとわかり易くなるのではないかと思う。まず、人間が肉体という乗り舟を誤りなくあやつっていくには、その肉体を運用するところの魂、意識がなければならない。私たちは、昼めざめている時は、肉体は自分自身であると思いこんで生活して

いる。ところが夜寝み、眠ってしまうと、そうした考えは消えてしまう。つまり、なにもわからなくなってしまう。このことはなにを意味するかといえば、肉体をあやつる魂意識は、夜寝む時に、次元のちがうあの世で、明日のエネルギーを補給するために肉体から離脱するのである。そうして翌朝目がさめるまで、あの世にいる。もちろん、肉体と意識は、霊子線を通してつながっているから、肉体に危険がある場合は意識はめざめる。しかし普通は、夜が明けるまで何もわからず眠り続ける。そうして、朝がきて、目がさめ、肉体と意識が密着して、はじめて一日の生活活動を行なうわけである。

そこで、人間の魂、意識をして意識たらしめているものはなにかというと、意識の中心であるところの想念という場であり、その想念の場に、あの世で補給したエネルギー

が貯えられ、その貯えたエネルギーを放出しながら想念活動をしてゆくわけである。このためどんな超人でも、仮に、一週間一睡もとらず働いたとすれば、その人は死を招こう。なぜなら、肉体というものは、口から補給した食物以外に、想念の場から放出されるエネルギーによって維持されているので、そのエネルギーが消えれば肉体の持続は不可能になってしまうからである。

ここで重大なことは、あの世の人のエネルギーの消費量と、この世の人の消費量とでは大きなへだたりがあるということである。この世の人は肉体を持っているために、その消費量は非常に大きいのである。それだけに眠ることによるエネルギーの補給は絶対に欠かせない人間の行事の一つといえる。否、この世の一切の生物は、すべてそうした

睡眠によるエネルギーの補給を受けるように仕組まれている。

さて、想念は、このように生命活動に必要なエネルギーを補給する場としてとらえられた。そうして補給され貯えられたエネルギーを、今度は、想念という形に変えてゆく場所でもあるわけだ。エネルギーがエネルギーのままではなんの作用も効用も生まれてこない。エネルギーが動力にかわり、機械を動かすことによって、はじめてそのエネルギーの真価が生まれてくるように、人間の想念も、神から与えられたエネルギーを動力とし、肉体を動かし、意識活動ができるように仕組まれている。したがって想念という場は、あらゆる意識活動、行為の源であるといえよう。それ故想念は、本来、美醜、善悪、黒白のない透明な、自由な、創造的なエネルギーの場であるはずである。

ところが人間は、幼児から子供に子供から青年、壮年に進んでいくと、外界から入ってくるもろもろの諸現象に反応を示し、想念の場は、いろいろ変色し、勝手な作動をはじめてゆく。すなわち、五官を通して入ってきた外界の諸現象にたいして、想念はそれを受けとめ、本能や感情、知性にエネルギーを送る。するともしその人が、本能や感情にたいして知性が遅れているとすれば、本能や感情が異常にふくらみ、動物的、衝動的な性格を形作ってゆくことになるだろう。同じ物を見、同じことを聞いても、人によってその反応の仕方はちがっている。これは、知性、感情などの各々の分野が、転生輪廻という魂の遍歴と同時に、今世において作り出した意識の姿が、想念という場を通して活動するからである。したがって、人それぞれの想念の姿はみなちがっているであろう

し、想念の浄化ということは非常に大事になってくるのである。

反省とは「止観」である。「止観」とは、浮かんでは消えてゆくさまざまな動きをみせる想念の動きをとめて、まず、自分の過去をふりかえり、過去の想念の動きが、本能にたいして、知性にたいしてより強く、弱く働きかけていなかったかどうか。強く働いた理由はなんであるのか、弱い原因はどんな理由からかということをみつめることである。そうして、円型であるべき心の姿が、凹凸があったり、三角であるとすれば、その部分を修正し、二度と再び想念化しないようにすることである。想念化とは、想念は行為を伴なうので、凹凸をつくる想念の芽を育てないようにすることである。聖書の中に「色情をいだきて女を見るものは、すでに心のうち姦淫したるなり」と書かれてあるように、

想念は行為を意味する。箸一本上げおろしするにも意識の命令なくては行なえないのである。それ故、神の道は、現実の行為以前の想念が問題になる。この世の法律では、想像は自由で、行為があってはじめて罰せられるが、神の道は、ちがう。

心の中で悪を思ってもいけないし、悪とは調和を乱す想念であるからだ。

人間は神の子であるので、慈悲、愛、寛容、勇気、協調などの想念から離れると、その離れた想念の分量だけ、自分で自分を痛めることになるのである。

以上の説明から想念を要約すると、想念とは、神からいただくエネルギーのいわば蓄電器の役目を果たす場であり、そうして、その充電されたエネルギーを放出しながら生活活動を行なう大事なもう一つの機能を持つ場であるということがわかった。

人間の心を称して、それは発信器であり、受信器であるというのも、こうした想念の場を通していえるわけである。以心伝心とか、精神感応（テレパシー）というものも、想念という発信装置、受信装置が活動されてはじめていえるのであり、これがなければ、人間の意識活動は不可能になってしまう。

もう一つ、想念について大事なことは、人間の心は発信、受信器のほかに発電装置という自らがその生命活動を行なうエネルギーを生み出す場を持っているということである。植物、動物にも心はある。けれども植物、動物には、創造エネルギーを生み出す場は与えられていない。なぜかというと、植物、動物は神の創造物であるからだ。人間も、神の創造物にちがいないが、人間は、神の子である。神の子ということは、宇宙即我と

いう神の心を具有しているからにほかならない。神は自らその叡知と無限のエネルギーを生み出し、貯え、放出してこの大宇宙をつくられた。そうして、その創作した天地に、中道という「法」に生命をふきこみ、そのなかに、姿をかくされた。万生万物は、中道という「法」を通して生かされ、生きてゆく生命体となったのである。しかし人間は神の子として、神の意を体し、この地上を仏国土とすべく、何千何万という人類が誕生したのである。人類の目的は、仏国土という「法」の具現化であり、心の王国をうつした社会をつくることである。神がその姿を万生万物を生かすエネルギーにかえると同時に、人類という姿にかわられたわけである。人間が神の子であるというその事実は、天地創造と同時に生まれたものである。

しかし、人類の歴史は暗く悲惨なものであった。……時に応じて、さまざまな天使がこの地上に誕生して神の道を説いていった。人類が神の子にあるまじき想念にふりまわされるにしのびず、人類を救うという立場から、その折り折りの時代に合わせ、それぞれの目的にそって光をかかげてきたわけである。神は必要とあれば、その姿を現わす。しかし、人類と神との距離はあまりにもかけ離れ、あの世とこの世を含めた地球人類のなかで、神と直接交信を持ち得る天使は、そう多くはない。一升のマスには一升の水しか入らないように、それ以上入れようとすれば水はあふれ出てしまうからである。神と人類とのかけ橋の役をされるのが大天使といわれる人びとである。

人間が神の子であるという事実は、ブッタの宇宙即我によって証明されるところであるが、さらには、天地創造の過程と人間の役割を一べつすることによっても、おおよその見当がついたと思う。人間の想念という場は、神の子としてのエネルギーを生み出す発電所であるという意味がおわかりいただけたと思う。

こうみてくると、想念という場は、発電所であり、発信所であり、受信所の三つを兼ね備えた場所であるともいえる。そうして、想念は、心と肉体を維持する大事な役目をも同時に持っているといえる。それはエネルギーとしてとらえられるからである。

ところで想念が想念として働いている場合は、単なるエネルギーだから問題はない。問題は知性、感情、本能といった心の機能に働いた場合に、理性というあの世の意識が中和されている時はいいが、そうでないとエネルギーに色がついてくる。

想念の流れを水に譬えてみると、水は無色透明である。次々と湧き出る水はあくまで無色無臭の水だ。その清水に、知性という青色の染料、感情という赤色の染料、本能という黄色の染料があって、それぞれが意志を通して勝手な行動をとり、青や赤や黄色の染料が流れ出たとすれば、水はそれぞれの色に染まってゆくであろう。そうして無色透明の水は次第に清水としての機能を失ってゆく。しかし、水がいろいろな色彩をつけたからといっても、水そのものの本質にはかわりはないはずだ。清水に色が付着したということにすぎないからである。水はどんどん流れ出ており、青、赤、黄の染料の流出をとめれば、ただちに元の清水にかえるであろう。青、赤、黄の染料の流出を、誰がセーブしてゆくか。つまり、清水にもどしたり、中和させる働きは、どの部門かといえば、

それは理性なのである。理性という中和剤が、三つの染料を清水にかえ、あるいは清水に近いものにして意志に働くときに、人間の想念と行為は、本来の姿に戻ってゆくのである。

中道の心は、私心のないことである。色のつかない心だ。まるく大きい、そして、理性の働きが各部門に万遍なくゆきわたり、それぞれの染料を中和させてしまう状態をいう。こうした時に、心全体を蔽っていた諸々の色彩がうすれて、神から直接の光をうけることになるのである。いうなれば無色透明な水に還ってゆくのである。

このように想念という清水、エネルギーは、人間の心と肉体を形作っている源であり、想念の浄化こそ神の子にかえる唯一の道であるということがいえる。

本能

本能については、現代医学、心理学の面でかなり追及され、本能とはこういうものだと明らかにしているが、ここで述べる本能については、こうした既成の学問上の見方、とらえ方、考え方と多少ちがっているので、その点、あらかじめご諒承願いたい。

本能とは一切の生物がこの地上で生きてゆく上において神が与えた最低の必須条件である。

もしも本能というものを、神が生物に与えなかったとすれば、生物の生活、種族の保存は不可能となる。したがって、人間も動物も、この本能を身につけて地上に誕生している。

本能を大別すると第一次本能と第二次本能がある。第一次本能とはある心理学者がいうように真性本能であり、第二次本能は仮性本能と名づけられる。真性本能とは、人間も動物も等しく持ち合わせているところの純粋本能、つまり飲食本能と性本能である。学者によっては、母性本能を加えている人もいるが、これは食と性本能から生まれた本能といった方がいいかも知れない。また学者によっては性本能は真性本能ではないという見方をとる人もいるようである。動物実験の結果、環境説を唱えて、これは教育された本能ではないかとみる人もいるが、野性で生きるべき動物を一定の実験室という枠内でとらえようとするところに無理があるようである。こうした方法では本当は、一〇〇

%の結果を出すことはできない。野生の動物は野生のなかで生活し得るようにつくられているので、したがって動物の本能を正確に知ろうとするには、実験室という枠内から離れてみるより方法がない。

また本能のなかには、食、性の二大本能以外に、闘争、逃避、拒否、好奇、服従、獲得、建設、誇示、群居、母性などの本能があるとみる人もいるが、これらは、何れも二大本能を軸にして動いているとみていいのである。たとえば、食本能からは、闘争、逃避、拒否、獲得、建設、誇示といった本能が導き出せるし、性からは、好奇、建設、群居、服従、あるいは闘争、獲得などの本能が容易に引き出せる。

食、性の二大本能を第一次本能あるいは真性本能と名づけるとすれば、闘争、逃避、

拒否などの本能は、いわば生活習慣からくるところの第二次本能、仮性本能であり、ここで問題にする本能にもとづく欲望である。第一次本能というものは、一定量以上求めれば、ある時間必要を感じなくなるものである。食べものは腹一杯食べれば、しばらくは欲しくはない。性本能にしても、目的を果たせば中断する。ところが第二次の本能的欲望は無限に広がっていく。ここに一次と二次本能の大きなちがいがあるわけである。

動物たちの生活の基本は一次本能のみで行なわれている。もちろん、本能だけではなく、動物によってはごくわずかな知性、感情も加わって行動の態様を形作ってゆくが、本能の部門だけを抜き取ってみると、二次本能の働きは、人間をのぞいてはほとんどみられない。またそのように作られているものだ。であるから、彼らは、人間のように欲

望を発展させ、他を侵略するということはない。生きるのに必要量の食べ物を得れば、もうそれ以上他を襲うことをしない。足ることを知っている。このため彼らの生活は、人間が侵さないかぎり、永遠に続いてゆくだろう。

さて食、性の一次本能にもとづく二次的本能、つまり無限に発展する欲望は、人間にだけ与えられている。動物にはほとんどない。なぜか。それは人間が神の子として、それらの欲望をコントロールし、理性と智慧によって、本能にもとづいたその原動力を調和に志向させるように仕組まれているからなのだ。

すなわち、本能が持つ機能というものは、食、性の、生活の基本形を軸に、この地上をより調和させてゆくための欠かせない原動力となっているからだ。生活のない調和は

あり得ない。調和とは生活を土台にしてはじめて成り立つものである。原野を切りひらいて道をつくり、鉄道を敷き、列車を走らせる。物の流れがスムーズにいけば、人びとは必要なものを簡単に手に入れることができる。動物と同じように、その場かぎりの生活では、自然を開拓し、自然の恩恵と慈悲を本当に知ることはできない。与えられた環境を整備し、住み良くし、草花を植え、米麦、野菜を耕作することによって自然と人間の調和が一層促進されてくるものである。本能は、それ故に生活の基本である。ここを出発点として人間は人間らしい生活を創り上げてゆくものである。したがって本能の領域は、調和の基礎でなければならないはずだ。この意味で、本能の領域は極めて重要な意味を持ち、生活の原動力であるといえる。ところが、その原動力が意外な方面に発展

していくというのが現状なのである。

闘争がそうであり、誇示がそうである。拒否、またしかり。これらの本能的欲望は、地位、名誉、金に走ってゆく。逃避とか好奇といった欲望は、怠惰、愛欲などに形をかえてゆくだろう。

もちろん、これらの欲望は本能の領域のみではなく、感情、知性の影響をうけて動いていくが、食、性の本能がもっとも強烈に刺激するためにおこる欲望である。こうした、本能にもとづく、生存を発展させる欲望があるために、人類社会の混乱が続いているわけである。

一次本能の食と性について、もう少し説明を加えてみよう。

まず食について。これは生物がこの地上に生存するかぎりは絶対に欠かすことのできない本能である。生まれたばかりの赤子が誰も教えもしないのに母親の乳房をさぐる。このことはあの世の習性、前世の習慣が生まれたばかりの赤子をしてそうさせるのである。ある学者は食本能を原始本能といっている。原始でもなんでもない。人間以外のあらゆる生物はすべてこうした習性を持ってこの地上に生まれてきている。したがって、食べる本能は生物が生きてゆく上に欠くことのできない第一の条件であり、あらゆる生物に平等に与えられている本能である。食べる本能を停止すれば、生物の生存の維持は不可能になってくる。

次ぎに性本能。性本能は種族を保存するということから、神が一切の生物にこれまた

平等に与えた。人間も動物も、ある一定の年齢に達すると、性本能がめざめてくる。やがて子を生み、子孫を残してゆく。

ここで性本能と愛についてふれながら、食本能との関連を述べてみよう。

愛は寛容、包容という神の光であり、調和の姿である。性本能を通して精子と卵子が結合する姿は調和の結晶である。性本能のみで子を生む動物たちもいる。感情や若干の知性が加わって子孫を残す動物もいる。性本能と感情、知性、理性が加わって調和の結晶として子を生み育てる生物もいる。これは人間である。

人間の、性本能を通した愛の姿というものは、こうした理性や知性の機能の充足を経て為されるものを最上とする。もし官能の満足のみで性本能を働かせ、それが愛だと思

ったら大きな間違いである。これでは最低の動物と少しもかわらない。愛でもなんでもない。愛はたがいに扶け合い、補い合い、はげまし合い、そうして時には峻厳なものである筈である。結婚の根本は魂向上のための社会生活における最少の単位である。家庭は社会の原型であり、出発点であり、調和の基礎である。こうしたことを忘れて、性本能の満足が愛であると考えたら大変である。第一、愛という情緒はなにも男女の関係のみではない。隣人愛、友人愛、親子の愛、師弟の愛、社会の愛というように、もっと広く、多面的である。ただ愛の基本は男女から始まる。したがって男女の愛は、社会愛の基礎的条件として重要な位置を占めていることは否定できない。しかし、性本能の満足が愛とされたらお終いである。

戦争と平和――。人類の歴史はこの両極の間を何千年となく往復してきたようである。殺し合いがなければ性が乱舞する。平和は女の世界。男は戦士であることが誇りだった。

食と性の二大本能が、戦争と平和という両極の世界を創り出し、欲望の渦をひろげてゆく。現代は地上の一部を残して表面は平和である。平和が続くと、性本能が頭をもたげ、見るもの、聞くもの、これに結びつけてゆく。芝居も、小説も、風俗も、より強烈な刺激を求めて、あたかもそれが当然の成り行きのように動いてゆく。性の狂宴は、天災か戦争でも起こらぬかぎりブレーキがきかなくなる。ソ連では、性病が蔓延しだしたため、性病者の性行為にきつい罰則を設けたといわれている。日本やアメリカは、この点自由だから、方向転換がむずかしい。

食と性本能が動物の姿のような形で人間を動かしてゆくと、いきつくところは動物以下の最低の地獄である。動物の本能には限界がある。人間の本能には限界がない。本能を欲望に転化させてゆく能力が与えられているからである。だから本能の衝動が動物的になると、手がつけられなくなってくる。

たとえば、食についていえば、動物たちは単純で、その場その場で満足している。越冬する動物は越冬するに必要なものを確保する、あるいはそれに耐え得るカロリーをとればそれ以上求めることをやめる。しかも彼らは同じ種族を侵してまで自分が生きようとはしない。昆虫のなかには、冬が近づき死が迫るとメスがオスを食べてしまうのもいるが、これは種族保存の儀式として彼らに与えられた習性である。ところが人間の食本

能は無限に広がってゆく欲望が表裏一体をなしているから、動物にもみられないような同族の殺傷をしてまでも、自己保存を遂げようとする。

戦争は、その最たるものである。

現代は、経済競争だ。自社が生きるためには、他社のことなど構ってはいられない。産業スパイを放ち、あらゆる知恵をしぼり、才謀をめぐらして他社をだし抜き、利益を独占しようとする。そうして同業の他社を、ことごとく傘下におさめることが企業の最高の目標になってくる。最低の費用で最大の利益をあげる。これが企業人の鉄則であり、この鉄則を貫いた者が偉大な経営者といわれ多くの人びとの賞賛を博している。

欲望、競争、発展、成功……。

信長は自己の欲望を満足させるために天下統一という大義名分を旗印に、他国に侵略する。現代も、戦国時代と少しも変わらないようである。変わったのは直接、人殺しをするか、しないかのちがいだけのようである。

こうみてくると、食と性の本能に人間がいかに支配され動いているかが分かる。そうして、その本能に支配された人間のゆきつくところは、憎しみ、悲しみ、そして苦悩があるだけである。本能そのものは肉体生命の保存がその目的であるが、欲望という怪物は己自身を破壊するばかりか、動物や自然をも同時に破壊してゆく。人間はそれでも満足なのであろうか。

私共は、人間の欲望、執着についてよくよく考えてみなければならないと思う。

本能の概念について一応締めくくってみたいと思う。

既述のように、食と性の二大本能は人間が地上で生存するかぎり、これを切り離すことはできない。切り離したら死滅である。死滅は神の心に適うものではない。神は生存に必要な心を人間に与え、生存にふさわしい環境を与えているからである。

動物と人間のちがいは、人間には豊かな心があるということ。動物は本能のままに生かされている。人間はその本能を自らコントロールしながら、本能から生じてくる地上生活の原動力を活かしながら、自然と人間の調和を進めてゆくものである。

その本来あるべき調和の目的が、争いや性本能に翻弄されるということは、一口にいって、知・情・意の知と意に自分の心をゆだねてしまうからである。知とは知性のごく

一部の表面の部分。意とは、我欲を生む表面的な本能的意思と感情の一部分である。もちろん意志も入るこの問題については後でふれるとして、ともかく心の領域の極めて表面的な知と意に左右されるため、人の世は調和とは反対の方向に走ってしまうわけである。もし知と意に情が加われば、たとえ知性が表面的な働きしかしなくても感情、理性が作用して、まるみのある人間性が生まれてくるであろう。意についても、意思（心の全体）から意志に向かう場合でも、もっと豊かに作用するはずである。本能、感情でも、表面意識が独立して働くときは、その部分が異常なふくらみを見せ、まるく大きな心が変形して人間本来の円満な人格は期待できなくなってくる。

本能的な欲望は、こうした理性、感情、知性、意志の円満な作用から離れて、特に、

理性のコントロールから独立して、表面的な知と意が本能に乗っかって動いてゆくというのが実情である。

戦争と平和はその最たるものであろう。この場合の平和とは、真の平和ではなく、欲望に翻弄された戦争の変形した姿をいう。したがっていつ戦争が始まるかわからない。現代がそういう姿である。争いの元は、生活の維持である。利益追求である。食べることである。食べることがさまざまに変化し、発展して、その発展の途上に国と国あるいは人と人との利害が相反してくると、血で血を洗う争いに飛躍してゆくのである。戦争が終り、物が出回り、生活が楽になってくると、今度は情欲が頭を持ち上げ、性の狂躁曲がくりひろげられてくる。

そこで、人間から欲望を切り離すことができないものかどうかである。経済学の第一ページに「経済は人間の欲望を土台にして動く」としてあり、欲望のない経済は考えられぬというわけである。人間が肉体を持つかぎり、肉体維持の本能はしかたがない。しかし人間は肉体だけではない。精神という心を所有している。その心の一部の作用が人間の全人格を動かしているとしたら、これほど愚かしい、これほど浅薄な話はないであろう。心という精神をフルに働かせば、そこからあらゆる能力が生まれ、人間同志がツノつき合わせる無意味さを悟ることができるはずである。しかも、経済と欲望という危険極まりない相互関係から、人間は、はじめて解放され、調和という、本来の人間目的のレールに乗ることができるであろう。

欲望の元凶は肉体にまつわる執着であり、それも食と性の二つに代表されるといってもいいだろう。したがって、人間は大低あの世に戻ってから後悔するのである。あの世では、食と性はこの世のような切実さはない。食べることも、性も、現象界とは異質である。食べる心配もなければ、性に翻弄されることもないのである。もちろん、地獄は別である。彼らは、その想念のなかで、想いを遂げ、想いに翻弄されている。地上の何倍もの苦しみのなかで、その強欲のとりことなり、それを果たそうとしている。クタクタになって、精も根もつきはてる。彼らは、その無意味さを知るまで、そうした我欲の渦から抜け出すことができない。哀れというほかはない。

現代の物質文明下に、人間から欲望をとり去れということは酷であろう。また、人間

は、心と肉体という二つの機構と異質のボディーを持って現象界で生活しているわけだから、あの世の規準をそのまま当てはめることはできないし、現代の意識社会ではそれは不可能であろう。

そこで大事なことは、精神と肉体の調和、つまり、そのどちらにも片寄らない生活態度が現象界の人間に課せられた生き方ということになろう。

すなわち、足ることを知った生活、感謝と報恩の生活、協調、協力の生活ということになる。

足ることとは、与えられた現在の環境を最善に生かし、度を越えないこと。度とは欲望の発展である。協調、協力とは共存である。たがいにないものを補い合い、助け合う。

こうした生活態度は、そのまま中道の生活であり、本能の機能が円満な姿で働いていることを意味する。本能がこうした円満さを得るには、知性、感情、理性、それに意志という五つの各領域が万遍なく働いて、はじめて実現するものである。それも、人の才能とか、知識とか、背が高いとか低いに関係なく、子供には子供の、大人には大人の姿で整えられてゆくものである。

人間が動物と異なり、その本能の領域を生かし、調和の原動力たらしめてゆくことこそ、人間らしい生き方であり、そこがまた動物とは大いにちがいのある性質を持つ生物であるといえよう。

人間の真の幸せはなにか。物が沢山あっても幸せにはなれない。反対に物がなくても

困る。ほどほどにあって、そうして、心は空に浮ぶ雲のように、とらわれのない毎日が送れることが大切なことなのである。

ここでいう心の分析は、今日の医学や心理学の分野で扱っている見方、とらえ方、考え方とは趣を多少異にしているので、この点をご承知おき願いたい。

感情

さて人間を称して、俗に、感情の動物といわれている。つまり人間は、感情によって動かされ、感情によって価値判断をしているというわけである。

心理学でも「行動には、物事（情況）にたいする主体の態度、あるいは価値づけを伴

っている。これを感情という」とある。

それほど、人間の感情というものは、日常生活の上で大きなウエイトを占めているのである。それはまた本能の領域と同じように、感情の領域は、実は非常な重要性を持っているということである。もしも、人間から感情を抜き取ったとするとどうなるであろうか。芝居や映画に出てくるロボット、あるいは想像上の知だけしかない宇宙人がいい例であろう。ＳＦに出てくる知だけの宇宙人は目的のためには手段を選ばず、残虐行為も平気で行なう。地上の建物を平気で破壊し、人間や動物を殺してゆく。彼等はそうした行為になんの自責も感じない。彼等には地球征服という目的だけがあって、そのためには障害となるものは一切合切取り払ってゆく。愛情とか、悲しみとか、怒りというよ

うな感情などは露ほどもないからなのだ。

感情のない人間――。これほど恐ろしい、変形した生物はない。時おりこうした冷血漢が新聞の社会面に姿を現わし読者を仰天させるが、人間には感情があるために、人間らしい人間社会の秩序が維持されているといってもいいであろう。

話は前に戻るが、人間は、本能的欲望に動かされると同時に、感情によってもその行為を決めている。

人間が環境に適応する行動には、異性に近づく、引きつけられる、また、危険から遠ざかる、離れるという二種の反応があり、これは換言すれば快、不快の反応である。そうしてそのどちらかに態度を決める。つまり、価値判断を下しているのは感情の領域で

あろう。そうしてその人にとって、快、不快はそのまま有益になる、ならないということにもなるであろう。しかしながら良薬口に苦しであり、自分の肉体上の良し悪しが、快、不快とは反対方向に結びつく場合もあると思う。このため、その人にとって、快、不快がそのまま、その人に有益であるか有害かは、ひと口には言えないと思う。

つまり人間の感情は、単純なものと複雑なもの、浅いものと深いものとに大別することができるのである。

もう一つ重大なことは、人間の魂である。

魂という概念はさまざまに解釈されているが、ここでいう魂とは、人間の心であり、そうしてその心の波動をうけた意識の全体を指す。しかし狭義には、人それぞれの前世、

過去世あるいはこの世の生活を記録した想念帯と表面意識を意味する。このため現世においては、生れつき、あるいは後天的感情がまざり合ってその人を支配してゆくのである。そうしてこれはなにも感情ばかりでなく、本能、知性、理性、意志についてもいえるのである。ともかく、人はそうした感情を持って、この地上界で修行するので、同じ兄弟でもその現われ方はちがってくる。

たとえば、同じこわいものをみても姉は恐怖におののくが、妹は平気で、むしろおかしさがこみ上げてくることすらある。また兄は内気だが、弟は外向的で強気であるという場合もあるであろう。このように、同じ精子と卵子の結合にもかかわらず、成長するにしたがい、感情の起伏がまったくちがってくる。これが俗に他人同士の場合は、もっ

とはっきりしてくるであろうし、たとえば、兄弟でも意見が合わないのに他人である友人、先輩の方がウマが合うという現象すら出てくる。

こういうように、人それぞれの魂の遍歴によって、感情にも密度の濃いもの、浅いもの、変化のあるもの、少ないものがあると思う。

概して、前世で命令の執行者であった者は、感情が激しく動く。今世でその感情を修正するために前世とは反対の被執行者の位置におかれた場合は、内面の葛藤は想像以上であり、社会生活からのがれたいという欲望に襲われることが間々あるのである。反対に、被執行者が今世で命令を発する立場に立つと人の感情を無視した言動に左右されがちである。

一方現世は男性だが、守護霊が女性の場合は、表面至って男性的で女性との交際はさぞぎこちないと思われるが、それがまことにスムーズにゆく。一見、武骨者のようにみえ、男らしい感覚を備えていながら、よく観察すると女性らしい何かをそなえている男性をよくみかける。しかし表面、女性のような人ざわりだが、つき合っていくと、どうして、なかなかテコでも動かぬという人もいる。こういうのは守護霊も男である。

反対に守護霊が男性で現世は女性の場合は、女性らしい細やかな神経がゆき届かないキライがあるようである。姿は女性でも、態度、言葉の端し端しが男に似ているといった具合いに。もちろん、現世における人それぞれの環境、生活態度、努力によってこうした傾向は修正されてゆくが、普通は表面的な態度とはウラ腹に、その感情の起伏には、

異性の色彩をつけているのである。

ともかくこのように、人の感情には、さまざまな動きがとらえられ、しかもその感情は、他の動物にはみられぬ人間特有の精神活動が行なわれており、その感情を大事に育てるか、あるいは感情のおもむくままに自分を動かしてゆくかによって、人の品性、情操も、高くもなり、低くもなってくるのである。

感情を表わす言葉に次のようなものがある。

直接的には、快・不快、激情、情熱、情動、情緒、情操など。

間接的、直接的な言葉を含むものとしては衝動、義理、人情、義務、献身、感動、感激、感謝、善、美、愛といったもの。

感情の特質としては、ある行為にたいして、第三者では容易に理解できない面があるということである。たとえば、男女の愛情問題は、その典型であろう。どうしてあんな男にあのような女が……。またはその反対の例。このほか、義理とか、義務、感動といった情動にたいしても、第三者では、類似の体験を持っているか、あるいは当事者にならないかぎりは、なかなかその行為を理解できないものだ。

これが本能の領域になると、誰でも理解できる。性とか食はもちろんのこと、母性本能、あるいは建設、群居、好奇、等々、理解できないものはわりあい少ない。

また知性の領域である科学する心の精神活動も計数的に割り切れてくるから第三者でも容易に理解することができよう。

ところが人の感情ばかりは、ふつうはなかなかつかめない。

ここに、感情の大きな特徴があるといえるし、他の動物にみられぬ人間の特質があるといえる。

感情を大別すると二種にわけられる。

すでに述べたように、それは、単純なものと、複雑なものである。

単純なものは、動物にみられる、怒り、恐れ、といったもの、または幼児の泣き笑いがあろう。

複雑なものは、次元が高くなると道徳的、宗教的なものになってこよう。

単純なものは極めて衝動的であり、利害得失の自己保存から出てこよう。単純な喜怒

哀楽の感情はその一例である。持続的なものとしては、恨み、憎しみ、嫉妬、といったものがあろう。

複雑なものには、美とか善、愛、そして喜び、悲しみ、哀れみ、怒り、といったものもあるであろう。

ここで、喜怒哀楽について考えてみよう。

喜怒哀楽という感情は、一見して、いかにも表面的なものと考えられ勝ちであるが、必ずしもそうとはいえない。

たとえば音楽について考えてみると、交響曲とジャズ音楽、あるいは流行歌にはそれぞれの持味があり、持味からいえばその良し悪しは区別できないが交響曲を聴きなれて、

さて、流行歌やジャズ音楽を聴こうとすると抵抗がでてくる。ジャズや流行歌はいかにも感覚のみの旋律で、心の中までひびくものは少ない。ベートーベンの「第九」と「リンゴの歌」を比較すると、その旋律の厚み、深さ、美しさというものに、非常なひらきがある。つまり同じ音楽という音の旋律から受ける喜び、悲しみ、楽しさ、というものに、かなりの相違があることに気づく。

絵画にしても、映画館の看板絵や、装飾絵のそれと、美術作品とではこれまた比較にならないし、美術品には、心に訴える喜び、美しさがあるだろう。

喜怒哀楽という感情は、このように単に、自己の表面的な都合や波動から生まれるものと、そうでないものとがあるということである。

「なんてあんなバカなことをするのだろう、何故ひと言相談してくれなかったのだろう」

親が世間知らずの子供の行為に、怒り、悲しむ感情と、

「俺の足を踏んでスイマセンの挨拶もしない。このヤロウ……」

という怒りとでは、同じ怒りでもその質がちがうのである。

一方は子を思う愛情からくる怒りであり、いわば救いの怒り。後者は肉体的な快不快、いわば利害得失からくるものである。

こうみてくると、喜怒哀楽の感情には、深い、浅いがあることに気付く。

愛の感情は、救いの感情なのである。一般的には、宗教的、道徳的感情を指して情操といっているが、その心情は、広く、大きな包容力を持ったものである。

イエス・キリストは気性の激しい方であった。その激しい気性は、しばしば爆発した。爆発の相手は魔王である。つまり当時は魔王の心を持った人々があまりにも多く、このため善良な人々の苦しみを救う意味で愛の怒りが燃えたのである。

釈迦は老いた父シュット・ダーナーや妻であるヤショダラ、そして子であるラフラをおいて出家した。現代なら無責任のそしりはまぬがれないであろう。しかし、当時の社会的背景等を考慮に入れると、もしもカピラに残り、その中から「生老病死」のナゾを解こうとした場合はどうであったか。第三者の結果論としては、やればできたという人もあると思うが、やはり食うや食わずの六年の修行が、人類の迷いを解く礎になったことは否定できない。人類を救うか、父と妻子そしてその一族のみの幸せを願うか。こう

したことから釈迦は決然と出家した。かくして、正法が人類の前に明らかにされ、人類に光明を与えることになった。釈迦も広く、大きな愛の行為に、立ち向っていったわけである。

こうした釈迦やイエスという神の子の愛の行為から、足を踏まれてカッとなる感情まで、その領域の巾の広さは大変なものである。

しかも人の感情は、先天的なもの、そして後天的な生活環境からもさまざまに変化していくものであり、そして、その波動は決して停止しないのが特徴である。体の調子、気分の置きどころによってもかわってくるし、天気の変化にも左右されるというシロモノである。さらに性別の相違からもその起伏の状態がちがってくるであろう。

一念三千の心の動きは、本能と同時に感情の領域が占めているウェイトの大きさを知ることができる。

苦しみ、楽しみ、悲しみ、恨み、怒り、そしり、ねたみ、嫉妬、憎しみ、悩みなどの動きは、すべて感情の領域がなしている精神活動である。

さて、人間の行動や思考の土台をなすものはなにかといえば、それはさきに説明した本能であり、次いで物を感じる感受性にあるわけである。しかしながら日常生活の行動や思考の大半は感情によって左右されているといっても過言でなく、感情の果たす役割の大きさを痛感せざるを得ない。本能（一次本能）は目的を果たせば内にかくれてしまうが、感情の波は四六時中動いているのである。

そこで感情の純化はどうすればよいかである。それにはまず、知性、理性、意志などの万遍ない共同作業によって、感情の奥深い神の子の自分である愛、義務、責任、善、美といった豊かな情操をひき出し、行為の上に表わしてゆくことである。そうしてその万遍ない共同作業は「反省」という行為を通して実現されるものであり、「反省」のない共同作業は作業として成立し得ないものである。

感情という意識にも、表面意識と潜在意識がある。通常私たちの生活の上で動いている感情意識は、表面意識の感情である。このため、自己保存の感情がどうしても強く現われ、こうした傾向が強く動き出すと、この領域が異常なふくらみをみせてくることになり、知性、理性の働きが弱くなってくるのである。そうすると、悲しみ、恨み、そし

り、ねたみ、嫉妬、憎しみといった感情想念が我者顔でその人の心を占領し、自分で自分が制御できなくなってきてしまう。

霊的には、こうした場合は、その人の背後に動物霊（主にキツネ）や地獄霊、魔王が憑き、その人の意識をあやつることになる。つまり感情の領域が異常なふくらみをみせ、知性や理性の共同作業の働きがにぶくなると、自分の意識の中に他界の悪霊が入ってきて、その人の肉体を支配してしまうのである。これは本人にとっても、家族にとっても不幸なことである。

そうならないようにするためには、さきにふれたように、各領域の共同作業が常に円滑に行なえるように、反省という行為を欠かさないようにすべきなのである。

ただここで注意したいことは、感情の成因は人によって皆ちがうということである。人の行動様式を決める性格（主として感情の働きによる）はなかなか変えにくい反面を持っているが、しかし変化しやすい要素をも備えている。つまり、性格は環境に左右されるし、この意味では極めて後天的であるともいえるのである。もっとも人間には先天的な気質というものが内在されているが、性格は年令の進行と環境の変化によって変ってくる。小さい頃はドモリであった者が成人するにしたがってそのドモリが治り、大政治家になったり、説教家になった例は、洋の東西を問わない。反対に陽気な子供が幾多の失敗を重ねて、やがて陰気な気弱な大人に変化していった例も非常に多いのである。このほかさまざまな人生経験を経るにしたがって、その人の性格が作られてゆく。先天

的気質は、多分に前世の性格が今世に持ち越されている。もっとも人によっては前世の気質とはまったく反対な性格を形作っている場合もあるのである。これはあの世の生活が前世の気質をかえてしまったためである。いずれにせよ今日の心理学ではこの気質の類形を分裂質、躁鬱質、テンカン質、などにわけているが、こうした気質が後天的な性格とまざり合い、複雑な形態をつくっているといえよう。

さて、反省という止観は、人の性格に合わせてやっていきたいものである。たとえば内気で、非社交的、興奮性の者が反省の仕方を間違えることによって、かえってその内向的性格をますます内向性にしてしまう恐れがある。反対に、陽気で活発で、ユーモアに富み、社交的な人が、反省を怠れば、自己の内面を正しく把握することはできないだ

ろう。反省の目的は、心の凹凸を修正し、そうしてそれがひいては健全な肉体をつくると同時に、家庭、友人、職場、隣人との調和をはかることにあるわけである。また反省の功徳は、心の内面にかくされた智慧の宝庫をひもとくカギを握っており、これをひらくことによって、人生の目的がいっそう明らかとなり、人間として生まれてきた生きがいを知ることができるようになる。その極点が仏智である。人間は誰しも幸せを求めているはずである。幸せを求めない者は一人もいないと思われる。その幸せとは、円満な人格と、誰からも好かれる自分自身であろうし、しかも、人生の目的を知り、智慧の宝庫をひもといた自分自身ではないだろうか。

感情の領域は、こうした円満な人格を形成させるもっともゆるがせにできない分野で

あり、この領域をうまくこなせる者は、やがて智慧の宝庫をひもとくカギを与えられるといってもいいのである。なぜなら、人格形成にとって感情の領域ほど複雑多岐にからみ合い、これほどその前進をはばむ分野は少ないからである。第一次本能は目的を果たせば終息する。二次本能は一次本能だけで働くものではなく、感情の作用が大きく物をいう。人に使われペコペコするのは嫌だ。人の上に立って号令をかけたい。いいところをみせたい。金が欲しい。金さえあれば面白おかしく世渡りができる。こうした欲望は二次本能と感情がまざり合ってできたものである。さらに感情はねたみ、そねみ、憎しみといった自己保存がもっとも強く働く分野でもある。また感情は人の先天的気質（先天的性格）を内に押しこめ、性格を後天的に変えてしまう働きをも持っている。

こうした意味で感情の領域ほど反省を重ねることが必要であるし、そうすることによってその円満さが養われてゆくわけなのだが、前述のように、人にはそれぞれ後天的な性格があるから、自分の性格に合わせた反省の仕方を工夫することが、もっとも望ましいのである。反省するようになってかえって人間が小さくなったのでは反省の意味はない。

知性

端的にいって知性の機能は、ものごとの認識であり、判断能力である。換言すれば科学する心でもある。

文明の基礎はこの知性による機能によって生み出されてきた。動物の世界は百万年経

っても同じ生活が続いている。知性は人間の大きな特徴であり、これの働きなくして私たちの文明はない、と断言してもいい。

ある人は人間の知性に絶対の信頼を置き、混乱と争いの人類社会は、やがて秩序と平和をもたらすであろうとみている。みようによってはそうかも知れない。是非そうあって欲しいと願うし、知性に肩入れする識者の希望に私たちも後押ししたいと思う。

しかし、知性のそうしたそれ自体の単独の機能によって、人類に秩序と平和をもたらすことができるかどうかとなると甚だ疑問であるといわざるを得ないのである。知性そのものは、いわば科学する心であり、したがってこれ自体から、心全体を働かす機能を導き出すことは、どうしても困難であるといわざるを得ないのである。

鉄道、道路、自動車、ビル、テレビ、飛行機、工場、都市、水道、ガス等々、これらの文明の利器は、とりもなおさず知性の機能から生まれたものである。人類の生活はたしかに便利にはなったが、文明は一方において多くの弊害を与えている。経済文明の発展は公害を生み出し、自然を破壊して、人間を窒息死させようとしている。

知性の機能は、あるものを追究し、掘り下げ、それによって認識を深めることはあっても、人間のもっとも重要な位置を占める愛、慈悲の働き、あるいは全体的な是非判断となると、知性は甚だ不得手になってくる。つまり知性には、ある一つのことを追究する能力はあっても、全体の調和という能力に欠ける面があるわけなのである。したがって、知性の単独の機能によって秩序と平和を願おうとしても、土台無理な要求ではない

かと思われる。

公害を防ぐには、もちろん知性の能力を必要とする。しかしこれを防ごうとする働きは知性の分野からではなく、むしろ感情、理性の機能から生まれてくるものである。

最近の学生は頭でっかちである。これは試験地獄にも原因があり、家庭や社会の責任でもあろう。が、さらに重大なことは、戦後の教育の在り方が、唯物思想一辺倒の感があり、知性の開発のみに力点をおき、人間のもっとも大事な情操、道徳、精神のあり方を軽視した結果であろうと思われる。東大事件、連合赤軍事件、イスラエルの空港事件は、このことを端的に語っている。彼らの行為には余情というものが感じられない。維新前夜の浪士たち、あるいは終戦間際の特攻隊員には国を思う責任とか義務、プライド

というものがあった。目的とその行動には彼らなりの理性が働き、滅私の勇気は人の心をうった。ところが、現代の学生気質はいたって自己本位で理論はそれをかばうための方便としてくっつけられている格好である。目的と手段がテンデンバラバラであり、何を求め、どうしようというのか、さっぱりわからない。しかし数学を解かせれば戦前の学生などかなわないであろう。論文を書かせれば理路整然として立派なものを書く。視覚的、現実的能力は確かによいのであるが、心とか、情操、人間性、神の存在ということになると、全くお手上げというのが現状のようである。心理学は単位をとるための勉強であり、歴史は見聞を広げるための知識としかうけとられていないようである。

天才教育や才能教育はこうした片寄った人間像を生み出し、世情をますます混乱と不

安に巻き込んでゆく。

知性が重要視され、才能のある者を社会が要求してくると、人間社会は次第にコンピューター化され、冷血人間がふえてくる。冷血人間がふえれば、愛とか情などというものは機械では裁断できないので、人間は物を生産するための一つの道具と化し、感情の交流、不合理の理が分からなくなり、孤独やエゴが横行するようになるだろう。こうなると、人間は、人間のために創り出した文明に、自らが縛られ、文明の奴隷となってゆく。さらに目的のためには手段を選ばなくなり、かつてのヒットラーやスターリンのような奇怪な人間ができるようになってくるだろう。

現代の人類にとって、頭痛の種はなんといってもこの知性の機能であると思われる。

工場の生産形態がおいおいコンピューター化され、人の働く場が失われつつある。このため、人間の主体制と生産との関係をどう理解したらいいか模索する時代に突入してきている。

学問や行政機関にしても次第にセクト化され、自派の立場を容認しないものは容赦なく排斥する自己主張にこり固まっている。学問の分極化、専門化はそのまま社会の分業化、専門化に拍車を加えている。なにが善でなにが悪かということよりも、発明とか発見に人々の関心が集中し、利益と享楽、自己保存とセクショナリズムが人生の目的であるかのようになってきている。

一方において殺人兵器の開発はとどまるところを知らない。原子爆弾、殺人光線等々。

また工場の廃液、モーターリゼーションの普及による大気汚染、孤独とエゴ、闘争とゲバ。右を向いても、左を見ても、安らぎなど見当らない。

いったいなにがそうさせるのであろうか。いうまでもなく、人間の知がこれらを生み出してきたのである。もちろん、こればかりではない。人間の意、つまり本能にまつわる欲望と好き嫌いの感情が知性をそそのかし、知性の機能を突っ走らせたことにその原因がある。そのために、今日ではその知性にたずなをひきたくとも、知性には理屈という宝刀があるから、いうことをなかなかきかない。あれよあれよという間に、文明は先へ先へと進んでおり、人間はこれに追いかけまわされているというのが現状である。

私たちはこれまで人間の知能というものは、脳の働きによると考えてきた。大脳生理

学はさまざまな方向から、大脳と知能について研究されている。そうして俗に脳は大きく重いほど知能がすぐれているともいわれている。日本人の平均的脳の重さは、男で一三五〇～一四〇〇グラム、女では一二〇〇～一二五〇グラムであるとされている。このため、知能の点では女は男より劣るとみてしまうようである。著名人の死亡時の脳の重さをみると、ナポレオン三世が一五〇〇グラム、ビスマルク一八〇七グラム、カント一六五〇グラム、桂太郎一六〇〇グラム、夏目漱石一四二五グラム、内村鑑三が一四七〇グラムだ。日本人の平均的脳の重さからみると、こうした著名人のそれははるかに重い。ところがブンゼンという化学者は一二九五グラム、文学者のアナトール・フランスは一〇一七グラムであり、平均値よりずっと軽い。知能が脳の重さに比例するとすれば七〇〇〇グラムのクジラや四〇〇〇グラムの象の方が、

人間より数倍優れていなければならない。ところが事実はまったく逆である。

また人間の脳の成長期は男は二〇才、女は一七・八才までといわれている。したがって脳の働きを物理的に考えるならば、この年令時がいちばん柔軟で、大抵のことは消化し得る、いわば知能のピーク時とみられるであろう。ところがどうだろう。韓国のキム少年はわずか七、八才で微分積分など高等数学を解いている。大学生でも解けないものをこの天才児はアッという間に解いてしまうのである。脳の発達過程と、こうした天才といわれる少年の脳の働きの関係をどう説明したらいいのか。物理的な脳の発達や成長だけでは割り切れない何かがあるといえるだろう。

また脳そのものが知能や感情、記憶をつかさどるとすれば、就眠時のそれをどう説明

するかである。心臓や肝臓は動いているが、聴覚、視覚、臭覚神経などは全然きかない。目がさめて、はじめてこうした感覚がよみがえり、記憶も息を吹き返すのである。

脳の働きは、五体を維持するための中枢機能であることにちがいはないが、脳細胞そのものに、私たちの意識があるわけではないといえる。私たちの意識は脳細胞とは別に、同じような姿で、もう一人の自分が、脳の機関を通して、働きかけているのである。つまり、肉体のほかに光子体という意識体があって、肉体と意識体の間を霊子線、脳神経を通して、連絡し合っているわけである。

であるから意識体である光子体と脳神経の連絡が極めてスムーズに、しかも光子体の奥（潜在意識）に連絡できるようになると、脳の重さや脳の成長に関係なく、キム少年

のような天才的な機能が可能になってくるのである。

人の心がわかったり、予知能力、あるいは天才的能力というものは、現世で学んで得たものは少なく、過去世やあの世で学んだ潜在意識に、表面意識が同通することによって生まれるものである。そうしてこうした能力は、人間誰しも内在されており、その能力が自由にひき出せるようになれば、現世を、不安と混乱に巻き込んでいる現実的知能にふりまわされている知性の独走を防ぐことができるわけである。

学問的に非常にすぐれた人たちが集まる階層が、あの世にはある。学者、科学者グループによる集団である。この世界の人びとは、ある一つの事柄を徹底的に追究してゆく人たちである。他のことはあまり考えない。またそうでなければ研究もできないだろう。

あの世での研究なら、あまり問題はおこらない。研究成果の使用は、人間生活全体を考えて行なわれるからである。ところが現世は欲望の世界である。社会主義も資本主義も、その根本は人間の欲望をふまえて成立している。このため、科学者が、自己の本意でなくとも、その研究成果が戦争の道具に使われたり、企業の利益に参加するようになると、文明の反作用は、もっとも顕著になってくるわけである。

今日の文明社会は、こうした学者や科学者の企業参加によって、自然破壊という結果を招来しつつある。学問や科学は人間生活をより豊かにするための基礎でなければならないものだ。欲望を満足させるための豊かさを求めてきているところに、今日、いろいろな問題が提起されてきているわけである。

人間の知性、その知性を働かせているこれら学者や科学者にたいして、その働きを放棄させたり、研究をとめさせたりすることはできない。むしろ、その長所をのばしてもらうべく、第三者はつとめるべきである。

問題の在り方は、私たちの知性というものが、感情や理性、あるいは本能というものから離れて、単独行動をとったときには、とりかえしのつかない破局を招くであろうということである。SF小説は未来社会を予測して、人類の終末や科学社会のさまざまな弊害なり矛盾を書いている。少なくとも私たちが住む現実的未来社会は、そうした科学というものが、人間生活の基礎として、成り立っていなければならぬと思うものである。

文学者や芸術家の中には、自殺をする人が、かなり多いようであるが、本来その作品

と、人となりとは同一線上にあることが理想と思われるし、そうあらねばならないと思う。何故なら、芸術の目的は、自然の美や人間の真実（人間神の子の真実）を追究し、それを、画布に、旋律に、文字に、客観的に表わしてゆくものだと思うからである。それだけに、真の芸術家は、物を見る、考える、思うことが、正しくなされていなければ成立しないし、その高まりは、神の子の自覚にまで発展してこなければならないはずである。

ところが今日の現状はそうではなく、いわゆる、職人芸術という小手先器用の技術屋が歓迎され、独りよがりの、人の意表を衝くものが受け入れられているようである。

これは才能と人格を同一視する傾向から生まれたものであり、欲望からくる感覚美しか受け入れられないところに問題があるようだ。ともかく、芸術と人格というものは本

来一線上を歩くものであろうし、またそうした芸術が迎えられる環境づくりがなされなければならない。

まず仏智とか大知識というものは、どこから生ずるのであろう。仏智は神の意識につながって、初めてその光を現わすわけである。正法は体験を基礎としており、学問や哲学から仏智を求めようとしても、得ることはできない。

私たちの心が、大宇宙が丸く、太陽が丸く、地球が円型であるように、まるく大きなひろがりを持っていることは事実なのである。大宇宙の姿と人間の本質に相違があっては、正法ではないからである。心の中には知性、本能、感情、理性といったものがあって、それらが相互に関連し合いながら、想念と行為がなされるならば、私たちの心は、

大自然と同じように、丸く大きくなっているはずである。ところが、知性だけが他の機能と離れて、特別に働いているとすれば、丸い心は変形してくるであろう。どんな理屈を吐いたとしても、破壊や無益な殺生、自殺とか独善がよいはずはない。万生万物は、中道という調和を目的として生かされ、生きているからである。

ここで調和について考えてみると、調和には高低がある。調和の極点は宇宙即我であり、低次元は自我我欲である。自我我欲は調和とはいえないが、自我我欲におぼれる者は、それが調和とみているかも知れない。現実の想念、行為は、客観的に善い事だと知りながらも、自分の都合で是非判断を下している場合が多いからである。そこで、調和であるかないかの一線は、自分の欲得のみで知性が動いているかどうか。物の効用のみ

に執心し、物の成り立ちを忘れていないかどうか。たとえば、心臓移植は医学の進歩に欠かせないが、殺人を犯してまでその成功を求めていやしないかどうか。目的と手段がバランスを欠くようでは調和にはならない。しかし一方において、自分では調和だと思いながら、無意識のうちに、自己保存で知性を動かしていることもある。また私たちの住む世界は欲望の世界であるし、社会制度も、これに準じて決められている。したがって、妥協を無視しては、かえって面倒になる場合がある。社会生活は複雑である。このために私たちはまず自分の足下から、できることから一つ一つ調和をめざしてつとめてゆくことである。それには、そうした努力と勇気と智慧というものが必要だろう。私たちが調和を目的として働いているときは知性が智慧として湧いてくるものである。

調和を目的として知性が働くとき、守護・指導霊の導きがある。これは何も知性だけではない。感情、本能、理性についても勿論のことである。あることについて追究し求めていると、私たちはしばしばヒラメキや直感というものが働く。また、まったく関係のない事柄がアッという間に結びつき、成功につながる経験を誰しも持っていよう。

これらの作用は、もちろん本人の努力の結果であるが、しかしその努力にたいする守護・指導霊の示唆があるからなのだ。自ら努力しないでタナボタ式に何かを求めようとしても、こうした作用は働かない。だいいち知性を通して知識という縁が結ばれていないので、智慧も湧いてこないわけである。前世で学んだものは今世でも何らかの形で同じものを学ぶ機会があるものだ。だから、今世でそうした縁をつくると、本人の心のひ

ろがりに応じて知識が智慧と化してゆく。

昔から、一をきいて十を知る、ということわざがあるが、これは一という縁が十の知識のひろがりとなることをいったものであり、それには物事の追究と同時に、調和という本来の在り方にそった生き方をしているならば、守護・指導霊の応援が得られ智慧として湧いてくるのである。

知識と智慧というものは同質のものではない。知識は外的なものであり、智慧はその外的な知識が心の中で濾過され、体験という努力を通して現われてくるものである。この点を間違え、知識の吸収がそのまま智慧になると考えてはならない。

また、慈悲の心で人に接するときには、自分でも想像もつかないような智慧が湧いてくる。これは霊道が開いている、いないにかかわらず、要は本人の心次第であり、神は愛の手をさしのべてくれるということである。

知性が他の心の機能から離れて単独に働く場合は、どんなに見事な発明発見でも弊害が出てくるだろう。しかし、心の円満さを心がけ、中道に適う努力を重ねるならば、くめどもつきない智慧が湧いてきて人類の平和に大きな貢献をするであろう。

「冷やかな頭で新しい事を口にするよりも、熱した舌で平凡な説を述べる方が生きている……」

これは夏目漱石の「こころ」という小説の一節である。

私たちは、ややもすると、このことを忘れ、才能のある者、天才や人の真似のできな

い奇人に憧憬の念を抱きたくなるものであるが、それよりもまず、熱した舌で平凡な説が述べられるような、心の広がりを持ちたいものである。

理性

これまで本能、感情、知性について述べてきたので、意志を見る前に理性について見て行きたいと思う。

まず理性の概念から考えてみよう。

辞書を調べると、理性とは「物事を道理によって判断する能力」としている。まさにそのものズバリの解釈である。

理性の機能は、総合力がその特徴であり、総合された能力は、幾多の経験の上に積みあげられて発揮されるものである。経験は道理という尺度を生む。さらに毎日の経験は、より一層高度の道理へと進んでいくものである。

であるから、経験の乏しい子供の判断と多くの人生経験を踏んできた老人のそれとは比較にならないファクターのちがいをみることができるのである。

もちろん、べんべんと年を重ねた老人もあるだろう。天才的ヒラメキを持つ少年もいる。したがって一概に年令だけで是非判断は下せないが、最大公約数で考えるならば、子供と老人では比較にならない相違をみることができよう。

ここで大事なことは、理性は経験という土壌を母体としながらも、反省によって、そ

の機能がより大きく豊かに育まれる、ということである。反省と経験はいわば相互関係にあって、両者はたがいに相補いながら理性の機能を、より一層たしかなものにしてゆくものである。

それでは理性は、現実的に、どういう場合に働くのだろう。

たとえば「怒り」についてみると、怒りを発すると相手の感情を刺激するばかりか、自分の気分まで悪くしてしまう。心臓をドキドキさせた怒りは、血液の血行を悪くし、ものを食べても消化が悪い。自分の肉体にとっても、気分にしても、そして人にも悪影響を及ぼすとなれば、「怒り」の損得勘定はプラスになるものが一つもない。ならば、怒ることはやめにしよう、と考えるのが理性の働きである。しかし、人間にはそれぞれ

持って生まれた気質なり、後天的な性格がある。気質の転換は時間を要するにしても、生活環境によってつくられた第二の個性、いうなれば性格は、本人次第で変えることができる。短気でなかった者が、人の上に立ち、人生が思うようになってくると、思うようにならないとわがままが出てつい気短になり「怒り」が習性になってしまう。こういう人は「怒り」は損得勘定で損だとわかっていても、「怒り」の感情を修正することがむずかしいものである。しかし「怒り」の感情を修正しないことには、心の平安はいつになっても得られない。そこで「怒り」の原因はどこにあり、何がそうさせるのだろう、と堀り下げて行くのが、これまた理性の働きなのである。

経験を土台にして、道理に適った心の修正を求めて行くのが理性の機能なのである。

理性が洗練されてくると、予想される事態に対して、「待った」をかけたり「促進」したりするようになる。

これこれのことはやってもよい。

これこれのことはやってはいけない。

というように、自分の行動に対して、ブレーキの役目をしたり、促進したりする。

ある指導霊が、「心の制御装置」という表現を使っていたが、「心の制御装置」とは私たちの心に内在しているところの「理性」であったわけである。

理性というものは、行動に移す意志を固める前の働きとして、非常に重要な役目を担っている、ということがいえる。

理性の機能は経験と反省によって強化されてくるわけだが、このことは心の内面から見ると、本能、感情、知性、意志といった相互の働きを通して育まれてくるといえる。もともと、理性の機能は、人間である以上先天的に備わっているものであり、他の動物とはハッキリ区別することができる。しかし、子供から大人に成長するにしたがって、理性の働きは、一層顕著になってくるものであり、この意味では、本能、感情、知性といったものに比べると、ズッと後になって動き出してくるといえる。

ちょうど、大脳の発育が旧皮質、古皮質、新皮質という順序を経て終るように、理性の機能は新皮質が出来上がってから十分な活動をはじめるといってもいいだろう。

理性は経験を土台としているだけに、経験が乏しいと、理性の働く範囲も自然と小さ

くなってくることは否めない。こういう比較は一部から異論が出るかも知れないが、男子と女子とではその経験の成り立ちがちがってくるために、女性は男性よりも、この点では一歩ゆずることになるようである。理性は経験と同時に、全体的な面から判断を下して行く能力であるから、経験する範囲が多様化するほど理性を培う下地が多くできるからである。

さて、理性は経験を土台にはしているが、人間の魂は、この世だけではなく、あの世があり、過去世があってこの世に在るわけだから、この世の経験だけで人それぞれの理性の度合いを判断することはできない。ここに、唯物論的な学問に限界があるといえるし、心の機能の是非判断がおいそれとは下せない悩みがあるわけである。

理性は経験という人生の様々な体験の上に養われる心の機能であるが、しかしこの世だけの経験で、人の理性を推し計ることができないというのが、その特徴の一つといえよう。

すなわちあの世の経験、いうなれば過去世に学んだ経験によって、人それぞれの理性の働きがちがってくるということである。

小学校、中学、高校、大学と進み、同じ職場に働き、社会人になったとしても、ものの判断がそれぞれちがうことは、誰しも経験するところであろう。

同じ精子と卵子が結合して生まれた我が子でありながら、兄弟姉妹の個性が皆ちがう。時代や環境、親の年齢にも影響されるであろうが、それだけでは律し切れない何かがあ

るようである。

Aという人は学校は出ていないが、道理をわきまえ、人格的に、社会的に優れている。反対にBという人は、最高学府を出て社会人となり人もうらやむエリートコースを歩みながら、家庭や部下たちに毛嫌いされている。このような例をよく見かける。

また、さまざまな人生経験が、かえってその人の素直な性格をゆがめ、理性の成長の芽を潰してしまう人もいる。

こうみてくると、理性の機能は、この世だけのものではないということがいえる。

極論すれば、理性はあの世の意識であり、あの世の経験が、この世に持ち込まれているといえるのである。また、前世、過去世の魂の遍歴が、あの世の経験を豊かにし、あ

るいは様々なものにしているともいえる。

あの世のある階層以上に行くと、女性の数がグンと少なくなるが、なぜそのように少なくなるかというと、地上界での経験がせまいために、理性を働かす機会に恵まれなかった、ということのようである。地上界社会の通例として、男は外に出て働き、女は家にいて家庭を守る、という長い習慣のせいかも知れない。敷居を一歩外に出ると、男には七人の敵がいるといわれ、外の生活は、いやでも応でも四方八方気を配る習性を強いられる。こうした生活の連続が、人との摩擦をさけ、自分を知り、相手を見る習慣を身につける理性の機能を発達させる素因になったのかも知れない。

ともかく、女性の数が少ないために、その階層の男性は、女性が必要なとき、女性の

いる階層にまで来て、仕事を手伝ってもらうことになる。

ちょっと横道に入るが、あの世にはこの世的な結婚生活というものはない。低い階層にあっては、そうした地上の想念を、そのまま持ち込んだ世界を造り出しているが、天上界では、こうした行為はなされていないのである。親子は一世（この世だけ）夫婦は二世（この世とあの世）といい、この世で仲の良い夫婦は二世まで続くようにいわれているが、仲は良くてもあの世で一緒になれるとは限らない。魂の在り方によってあの世の生活を別々にしてしまうからである。また、この世で結ばれず、あの世で華を咲かせるなどということも、夢のまた夢なのである。ただ、この世で仲のよい夫婦、あるいは事情があって添うことの出来なかった二人、あるいは一方が、来世（来るべき現世）

で結ばれることを強く誓えば、その思いは大抵遂げられるように仕組まれている。

いずれにせよ、男と女の理性の度合いは、地上での長い生活経験、転生輪廻の過程が、そうした相違を生み出したようである。

もっともなかには、素晴らしい女性もいる。男が束になってかかっても、歯が立たない、という理知の優れた女もいるが、こうした人は、まれである。非常に限られてくる。

理性は、経験を土台にしているからこれを発達させるためには、反省と行為（経験）しかないのである。

本能、感情、知性、意志の働きは、行為という経験を踏むことによって、ますます磨きがかけられることになる。

理性に磨きがかかると、心の循環が円滑になってくる。つまり、各種の機能の凹凸が丸くなり、行為に自然さを増して来る。なぜかというと、理性は、八正道のもっとも大事な「反省」役をする、もう一人の自分でもあるからである。

もう一人の自分には、知性や感情、意志もあるが、反省という機能の主役は理性の分野に強く表れるからである。

感情の最深部は、慈悲と愛である。

知性の最深部は、智慧の宝庫である。

意志の最深部は、中道の我であり、行為である。

本能の最深部は、義務と責任である。

理性の最深部は、もう一人の自分、つまり前記四つの機能を円滑にする鏡であるわけである。したがってこの鏡を絶えずきれいに磨いておかないと、通常は表面意識の知が走り、感情が飛び出し、本能がへこんでしまうことになるであろう。

理性が働くことにより、各種の機能は、まずその凹凸を修正し、そうして、表面的な働きから次第に内部へと進み、潜在された意識を表面に浮び上がらせることになる。

食、性の本能は、建設、調和という義務と責任の自覚を呼び起こすであろう。あの世の天上界の人々の本能は、調和という神の子の自覚が強く出てきているので、食、性にわずらわされず、義務と責任の献身の行為しか生じてこないのである。

ねたみ、そねみ、怒りという感情は、人をいつくしみ、助け合う心を育てることにな

る。

知識の吸収と、特定の事柄を追究する習性を持っている知性は、こんどは外に向って智慧の噴出口となり、偉大な力を発揮するであろう。

小我の温床と行為を決める意志の働きは、神の心である中道の行為を促す役目を果たしてくれるであろう。

このように理性の機能は、右のような各種の機能を、丸く大きく、そうして内在されている真の人間性を引き出す役目を受け持っている、ということがいえる。

理性は経験を土台にして反省することによって、ますますその働きを増して行く。理性の機能は、極めて客観性を持った働きにあるということが、これまでの説明でおわかりいただけたと思う。

理性はあくまで総合された意識であり、それだけに、あの世の意識であり、過去世の経験的意識を持って働いているといえる。

そこで、では私たちの理性を、具体的に、どのように向上させていけばいいか、理性は各種の機能と平行して育てられるものであるが、各種の機能に先行して、各種の機能を引き上げさせるための努力、効果は期待できないものかどうか。

理性は、心の機能の中の一つにすぎないし、それだけに、理性だけ大きくなっても、変に道学者じみて来て格好がつかない。知性、感情がいたって幼稚にもかかわらず、道学者的な理屈をいう人に出会うことがあるが、これではおかしい。やはり、知性、感情

も洗練され、しかも道理をわきまえているのでないと、なんとなくチグハグである。

結局、理性も心の一部であるから、相互に働き合いながら育てられて行くものである。

理性の機能を知って理性を高めて行くのと、漫然とした態度ですごして行くのとでは、理性の光り方がちがってこよう。

こうした意味から、理性を高めてゆくことは非常に大切なことであります。理性をテストするには、次のような問題が出たときに、自分の心の動きが、どのように反応するかによってある程度、評価することができよう。

たとえば、利害が相反した問題にぶつかったとする。人に金を貸したが返してくれない。人から中傷された。怪我をさせられた、というような場合に、つい人の責任にして

しまう。自分は悪くない、相手が悪い、一切の責任は自分ではなく相手にあると思い込んでしまう。そうかと思うと、自分もかつてはそうしたことがないとはいえない、あったかも知れぬ。プラス、マイナスすると、まあトントンだから、あきらめよう、という人もいる。また人によっては、自分になにかしらの落度があったからそうなったのではないか。火のないところに煙は立たないというから、自分のどこかに欠陥があって、それが今出て来た。二度とそういうことのないように努めよう、といって自己反省する。

理性の働きは、三番目の人のような考え方によって光を増して来る。その善悪は別として、責任の所在をすぐさま相手に課したり、プラス、マイナス、ゼロだというような態度では、理性の機能は働いてはこない。

自己反省は、正法の重大な課題の一つである。もし会員の方で、こうした自己反省が不得手だという人があれば、その人は会員としての資格に疑問がある。会員の資格は正法を信じ行なうことにあるのだから、理性を育てることを拒否する方は、やめてもらう以外にないのではないか。

自己反省は、あまり度が過ぎると、かえってマイナスになる。年がら年中、反省反省で、反省ばかりしていると、理性の機能は反対に働かなくなってきて、小さな人間が出来上がってしまう。

反省も中道である。反省は自分をいじめることではなく、第三者の立場で、客観的に自分を眺めることである。相手の心になり、相手の心から自分を見ることである。そう

すると、自分の欠陥がいろいろとわかってくる。

よく商売上の問題で聞かれることがあるが、正法を知ってしまうと商売ができなくなる。なんとなれば、慈悲と愛の心を持てば、商売して儲けることは愛の心に欠けることになるからだという。たしかにそういえないことはないかも知れない。ところが私たちが置かれている環境は自由主義経済、物を売買して、それで生活を立てている経済社会である。もし、利潤のない商売をすれば、家族や従業員の生活が出来なくなってしまう。神は人間を生かすために地球をつくっている。だから商売で儲けることは少しも差支えないのである。時代が進み人間の意識が向上されてくると、その仕組も変わってくるであろう。要は正法を行ずる者とそうでない人の相違は、足ることを知った生活であり、

儲けた金を自分のフトコロにしまい、自分だけのために使うか、それとも家族や従業員の生活を豊かにするために使うか、進んでは、困った人びとのために使うかによってちがってくるのである。

理性の機能は、こうした問題についても働いてくる。そうして、では「足る」とはどこまでをいうのか、というように進んでいくであろう。

「足る」ことの一線は、人それぞれの考え方があって、金額的に、一人当りここまでとはいい切れない。家族数や職業上の立場や環境などが加わってくるので、一線を引けないからである。「足る」ことの一線は各人の判断にかかっているのである。

一億円あっても足りない、また百万円で充分だという人もいる。人それぞれの心の持ち

方で「足る」ことの線が決まってくるが、ここでは図式的な結論は出せない。要は、本人の自覚を待つ以外にないのである。

いずれにせよ、理性の機能は、私たちの精神生活のバランスを保つ上に、非常に大きな役割を果たしているといえる。理性のない人間を想像することはできない。想像するとすれば、その世界は、おそらく争いに満ちた、腕力の世界であり、力だけの動物の世界になっているであろう。現実の社会では理性が働いていない、というより、理性を腹中深く押し込めて、ムリムリ世間に立ち向っているといえるかも知れない。誰も彼も、心の中では、この世は狂っている、と思っても、逃げることができないし、放っておけばおいてきぼりにされるので、やむなく、人を押しのけ、あるいは強い者について行く

という格好になっている。

理性を持った人間社会であるにもかかわらず、現代は、強い者が勝つ力の社会である。経済は欲望を主体にし、政治は金で動いている。

意志

まず意思―意志の概念から。

意思と意志。この両者は、もともと別物の機能ではない。意思とは意志に至る心の全体の「思う」「考える」それであるし、意志はそれにもとづく行動に通ずる意識の働きといってもよい。意思も精神作用なら、意志も精神作用である。

この二つの精神作用は、私たちが日常生活を営むための欠かせない心の機能であり、これの働きがないと、行動という、もっとも動的な、物質での生活が不可能になってくる。意思―意志のない生活、行動というものは考えることはできないし、もし私たちの心の中に、こうした作用が働かないとすれば、私たちは混乱の中であえぐことになるだろう。意思―意志は目的に向う行動の原動力であり、始動機関であるといえるからだ。

動物のそれは、本能と意志が密着し与えられたその範囲内で生活を営むものである。人間は本能のほかに、感情、知性、理性の働きを経て、意志によって行動して行く。しかも、その行動はある目的をもって、為されるものである。目的のない行動はあり得ないし、目的を設定して、それに向って行動して行くのが意志である。

意志と目的、この二つは、それ故に切っても切り離せない。

それでは目的は、どうして生れるか。また目的を設定させる意志は、何にもとづいて働いてくるのだろう。

ふつうは自我の意識である。自我があるために、私たちは意思し、意志をもって行動している。したがって、自我―意思がなければ意志することはできない。

そうすると目的は、おのずと明らかなように、通常は、自我にもとづく欲求によって目的が設定され、その目的に向って意志され、行動につながっている、といえる。

私たちの意思――意志は、このような精神作用を通して心の中で常に働き、行動しているわけである

ここで現実に眼を向けてみよう。

現実は経済競争という形を変えた戦場である。ベトナム戦争のようにむごたらしい殺し合いはないが、企業を単位とした修羅場が現実の姿である。金のない者はある者に仕え、人々は金を求めて、自分の意志に反した生活を強いられている。

何がこうした現実を作っているのであろうか。間違いなく、それは欲望の結果である。生きるための欲望、五官を満足させるために、人々は意思し、意志を持って行動している。同じ自我でも善なる自我ではない。偽我の自我が意志している、といえる。

修羅とは地獄である。弱肉強食の世界が修羅である。このため人々の心は片時も安心するヒマがない。何時どんな不幸が襲ってくるか分からない。不幸を未然に防ぐために

は、常に人より先に進み、夢を先取りするか、人の夢を横取りするか、それともいっそのこと夢を捨て、大樹の影となって安住するか、ほどほどに先取りし、ほどほどに休むか、ともかく、欲望と意志のぶつかりあいが、現実を修羅場と化しているようである。

地上界を修羅場にしているのは各人の欲望のせいであるが、欲望のモトは自我であり、自我の発現は肉体だけに局限した人生観、一寸先不明の心の働きにあるといえるだろう。

もし、人間の魂が永遠に生き続け、地上界の生活は永遠の一駒であり、魂修行の場であると理解されてくれれば、欲望に翻弄されるバカバカしさが身にしみてくると思われる。

もう一つ、キリスト教では人間の偽我・業を称して原罪といっている。業とは長い転生輪廻の過程において作り出されてきた執着のリンネである。

頭では「いけない」と思いながら、体の方がそれについて行けず、同じことを繰り返してしまう。酒は体に毒と分かっていても、宴席や酒のにおいをかぐと、一杯やりたくなってしまう。怒っちゃ損だと常々思っているが言葉のはずみで、どなってしまう。

分かっちゃいるけどやめられない。それが「業」のリンネというものである。

ここで業について、もう少し突っこんでいくと、人間の業とは、心の魔から生れる。一念三千の人の心は、天国にも地獄にも通じ、その自由な心が、執着にとらわれると、魔の世界を作って行くわけである。それゆえに、業（カルマ）とは魔である。自分の心の中から生ずる魔の働きである。キリスト教でいう原罪は、厳格には心の魔である。魔をつくり出すものは自己本位のエゴである。

この地上界は、各人の人生観のほかに、こうした業のリンネがついてまわるため、ますます物事の本質が不明確となり、認識でき得る五官に、物事の規準を置かざるを得ない、というのが実情のようである。

しかし、こうした状況を常にくりかえしていたのでは、自分自身も、またその周囲も、決して、良い環境を生み出すことが出来ない。業に打ち克ち、五官にふりまわされる自分自身から脱皮して行く以外には調和された自分も、環境もつくることはできない。

知恵と、勇気と、努力――。これを裏付け促進させて行くものは、ほかならぬ強靱な意思と忍辱である。

本能、感情、知性、理性というものは、人間としての立場を明らかにし、万物の霊長

としての働きを示す心の機能であるが、一方、意志については、そうした心の機能を、いかに具体的に現実的に、動的に表わしていくかの大事な機能を司どっているといえる。

正法が自力とすれば、意志のウエイトは極めて大きなものがあるといえよう。

意志の強弱が正法を自分のものとするか、しないかの分岐点になってくるからである。

正法の理屈を、いくら頭で理解したとしても、実行のない正道は描かれたモチにすぎない。

そうだとすれば、私たちは、この意志の機能というものを、もう一度、あらためて見直すことが大事ではないかと思うわけである。

意思とは、自我の全体をいう。

意志とは、行動の原動力である。

自我の全体である意思は、本能、感情、知性、理性、意志を含めた精神活動である。

意志は、その全体の一部といえよう。

意思が、ものを考え、思い、行動の決定権を司どっているとすれば、意志は、その命をうけて、形の上に現わし具象化して行く機能である。この意味で意志は心の各機能からみると受け身といえよう。

意思は人間にだけ与えられた特権である。動物は本能と意志がストレートにつながっている。ここに人間と動物の大きな相違がみられよう。

心の各機能が意志に直接的につながるとどうなるか。

感情的意志は、その時々の感情の変化でクルクルと変わる。朝のうちはこうだと思い行動しながら、夕方になると、その行動に疑問を持ち、朝とは違った方向にいってしまう。

本能的意志は、ガムシャラで、人の気持などおかまいなく、目的さえ通ればそれでよいという幼稚なもの。

知的な意志は、理論的、合理的、持久的ではあるが、独善的、算術的であり、本能的意志に似て、人の感情などあまり気にしない。

こういうように、心の機能の一部が意志につながると、こうした片寄った行動が表面に現われてくるのである。

これまでの私たちの行動は、心の機能を働かせながらも、欲望から切り離して物を考えることが出来ず、また欲望の概念すらアイマイであったとさえ言える。

欲望については、本能の機能のところで触れたように、それは性と食の第一次本能にもとづく諸々の執着心がもっともつよい。動物を含めたあらゆる生物には生きて行く本能があり、その本能の作用がなければ、私たちは一瞬たりとも生きることはできない。

欲望にはこのほか感情の快、不快によるそれがあるし、知的な欲望もある。欲望の根源は自分さえよければ他はどうでもよいという自己本位のエゴにある。この自己保存のエゴがさまざまに発展し、業をつくり、不調和をもたらしている。

欲望を土台にして意志するときは自分も周囲も常に不調和になってくる。

意志そのものは受け身であり、それ自体問題はないが、問題は本能、感情、知性、理性から生まれる意思がそれぞれ単独で動き、意志に通じると、前述のように、また、すでに心の機能の要約のところで記したように、

本能の働きが意志されると、愛欲、エゴ、闘争に流れる。

感情の働きが意志されると、争い、怒り、憎しみなどの心の思いが行動になって現われてくる。

知性の働きが意志されると、情操が失われ目的のためには手段を選ばなくなってくる。

理性の働きが意志されると、独善的になってくる。

という風になってくる。

したがって、意志を正しく機能させるためには、意思する全体の心の各機能を十分に働かせ、意志につなぐ工夫がなければならない。

強靱にして柔軟性ある意志は全体の意思の働きにしたがって、忍耐力、持久力、自制力といったもっとも理想的な形をとってくるだろう。

ふつう意志が強い、弱いという違いはどこからくるのだろう。

それはたいてい自我の強弱に左右される場合が多いものだ。自我の強い人はその欲望を果すため初志を貫こうとする。弱い人は、それでは自我が少ないかというと、これも周囲の思惑や自分に甘えて弱くなる。

どちらも欲望に根ざしているが、欲望に根ざした意志は最終的には強い人でも弱くな

ろう。意志の根底に、損得の基準があるから、損と分かれば変えざるを得ないからである。

意志の強さは、本来、人間としての自覚にめざめた時に本当に発揮される。

信仰の意志はどうか。これは堅いだろう。しかし、盲信、狂信に走ると、平気で人と争うことをしてしまう。

信仰の意志は感情の意志に入るだろう。

信仰の意志も感情の奥底（潜在意識）から出てくる場合は理性を通して、全体の意思として働くので、柔軟、強靱なものとなり、人と争うことはまずあり得ないだろう。

心の奥底は、潜在意識に入っているため、これらの機能は一つにまとまっているからだ。丁度、水面に現われた一つ一つの島でも海底が陸続きであるように、心の奥底は、

一つにまとまっているからである。

意志のない行動として、無意識の行動がある。これはどうかというと、本来無意識の行動というものはないのである。無意識以前に意識されたものがあって、それが無意識の行動として現われるといえるからである。

まかぬ種は生えない。

さて、以上のように、私たちの行動は、すべて心の反映として、現われる。

私たちの一つ一つの行動は、誰の責任でもない。皆自分から発し、自らの責任で為されている、ということが分かってくる。この意味では行為はその人を評価するもっとも良いバロメーターということになってくる。

行為がその人の表現体であるとすれば、行為の一切はその人の意思にもとづくそれであるといえよう。

ただここで注意を要することは、想念と行為が必ずしも一致せず、いうなれば偽善、偽悪という人の目をごまかしたそれも実際には起こり得るので、目に見えた行為が、すべてその人の意思であるかどうかは普通は分かりにくい。しかし、偽善、偽悪の場合は、いっ時は人の目をごまかせても、長いうちには馬脚を現わし、結局は本性（本来の意思）を現わしてしまう。

神の目は、自分の心にウソのいえない厳正なものだし、そうして正法は、善なる行為にちがいないが、いちばん重要視されるのは心という想念の在り方である。

女を見て色情を抱くは姦淫したと同じであるとするイエス様の言葉を想起すれば、この点の意味合いが明らかになるであろう。

しかし正法は、正しき心と、正しい行為を求めるものであるし、正しい行為は、勇をふるって努めるしかない。正しき心は正しい行為によって、はじめて実を結ぶものであるし、知性に内在する智慧は、そうした行為の中から湧いてくるであろう。

智慧は、経験という貴重な体験から生まれ、頭脳遊戯にふけっている間は、湧いてこないであろう。智慧は、腹からほとばしり、知識は頭を大きくするだけである。私たちの意思は、心の各機能の万遍ない働きの下で、よりよく育まれ、そうしてそれは、正しき善なる意志として、行為されてくるであろう。

ところで、意志の強さは、行為の持続性を意味する。あきやすく、クルクル変わるのは持続性の欠除である。持続性は記憶の連続としてとらえられるが、一方また信念という言葉に裏打ちされるであろう。

この意味で念と意志は不可分である。すでに述べたように、目的のない意志はあり得ないからだ。念は願いであり、目的意識である。ああしたい、こうしたい、あれが欲しい、これが欲しいという目的が意志となり、行為になっていく。

そうした念は、正しきものであればある程、持続性を伴うであろう。

八正道に正念がある。正念とは、慈悲と愛から生まれてくる目的意識であり、また、現実的行為の中では足ることを知ることである。足ることとは欲望の限度を知ることで

あり、進んでは人間としての目的を悟れば、残るは義務と責任しか残らない。

私たちの意志はそうしたときに、本当に発揮されてくるであろう。

八正道の正しさは、客観性にある。それぞれの立場や、自我や執着からこれを求めようとしても出てこない。問題が生じたときに、相手を批難する前にまず自己を省み、問題の所在を公平厳正な尺度で、もう一辺見直すことである。

あの世の姿をもって、正しさの尺度をみると次のようになる。

幽界の正しさは、自己本位であり、ご都合主義である。自分が主体で、人のことは構わない。こういう人は世間によくみられる。

霊界の正しさは、相対的である。私はあの人にあれだけのことをしてやった、だから

あの人は私にこれだけのことをしても良い、という考え方。こういう人は非常に多い。ある社会の裏側をみると、こうした判断が大半を占め、そうした考えで動いているといえる。外交の尺度は幽界ないしは霊界的である。よく新聞をみればこの点がひじょうにはっきりする。だから戦争も絶えない。

神界の尺度は、人を批難する前に自己を反省する。そうして自分に落度がなかったか。落度があればそれを修正する。落度がなければ批難する前に誤解を解くために話し合う。話し合って誤解が解けねば仕方がない、相手のために祈心を忘れないものである。

八正道の正しさは、まず神界の尺度から出発する。見方を変えれば、八正道とは最低の修行である。なぜなら、中道の心は、神界から始まり、神界以下では通用しないから

である。

菩薩の正しさはどうかといえば、一口にいえば慈悲と愛の心である。人の喜びを喜びとし、悲しみがあればその悲しみを取り除いてゆこうとする心である。愛という相互扶助の心が強く自我心が稀薄で、上段階に行けば行くほど、全なる心に近づき、大自然の意思である慈悲と愛の心になって行く。

如来は、衆生済度のみとなり、慈悲の心しかない。慈悲は大自然の心である。太陽、空気、水、大地……。生物が生きるに必要な環境を与え、与えて生かすのみしか知らないのが如来の正しさだ。

幽界、霊界、神界、菩薩界、如来界の各階層には数多くの段階がつくられ、神界一つ

とっても、上段と下段ではものの考え方に相当なひらきがある。下段は知が先行し、上段は行ないにめざめてくる。

意志の強さは、正しさの判断をどこにおいているかによって、大分ちがってくるだろう。

目的と意志は、このような背景によって、私たちの心と行為を形作り、人それぞれの人格をつくっている。

客観的な判断力は、心の各機能の相互の働き、すなわち反省によって培われてくるだろう。正しさと客観性はこうした中から次第に向上し、神界から菩薩界へと進んでいくわけである。

こうみてくると意志をどう働かすことが必要かが理解されたと思う。

心の各機能の凹凸をなくし、心の全体を通して意志につなぐ、こうすることによって、私たちの意志は仏国土建設にたいする深い自覚がうながされ、神の正しい意志として行為されてくるのである。

結語

次に、心の各機能と八正道との関係はどうなるのであろうか。

心が丸く大きく豊かであることは、それはそのまま八正道に適った心であるといえる。本能や感情が五官を通して想念行為されるとすれば、ものを正しく見ることも、思うことも、語ることもできないはずだ。知性にしても、これが単独で働き意志に伝わり行動すれば、これまた愛情のない冷たい人間になり、八正道の規範に反してくる。

つまり、心が丸いということは八正道の規範に適っているわけであり、反対に、八正道の規範に合わせて反省し、その想念と行為を改めてゆくならば、心も丸く、豊かになってゆくということだ。

心の機能は魂そのものの機能であり、心の機能を理解しておかないと人間の正しい在り方を把握することはできない。

その意味で、八正道の理解と同時に心の機能の把握が必要になってくるわけである。

また、八正道の尺度に照らして反省する場合に、まず円満な心の姿を想像することが

大事になってくる。なぜかというと、ものを心に描く場合と、描かない場合では念の働きがちがってくるからである。

発明発見には必ずその前に心に描く作業がなされている。飛行機や自動車、電車、その他あらゆる具体化されたモノには、そのモノをつくる前に発明者の心の中で具体化されているはずである。具体化されていなければ形の上に表現されようがないからである。

想念はモノを作る。

想念は行為である。

神は行為以前のその人の心を見て裁く。

という意味がこれで理解されるであろう。

すでに触れたように行為の前には想念の働きがある。想念の働きのないものに行為はありようがないからだ。魔が働くとか、無意識の行為というものがあるが、これとても無意識以前に心に描いた意識活動があり、それを因として、ある瞬間に縁となって行為になって出てくるのである。

憎み、そしり、怒りの感情をいだきながら、表面はいかにも信心深い人もあるが、心を誤魔化すことは、やはり、できないものだ。心に描いたものは行為になって必ず現われてくるので、時の経過とともに形を変えてその人を苦しませる。

こうした意味から、想念はそのまま行為であるともいえるわけである。

こういうように、丸い心を心の中で想像し描くことは非常に大事なことであり、そう

して、その丸い心が何時どこで歪を作ったかを反省していくと、冷たい人間になっていたとすれば、知性の部分だけが発達して大きくなり、他の機能が小さくなっていたことが理解されてくる。

意志が強く、人の言うことをきかない人というのは、知性が強く、愛情（感情）の少ない人に多い。つまり、感情の部分がカサカサに枯れていて、うるおいのなくなっている人である。

反対に意志が弱く、人の意見で心がコロコロ変わる人は知性の働きより感情で動く人が多く、知性の部分が活動を停止しているといえる。

何れも、八正道のどの部分に照らしても正道に適っていないわけである。『心行の言魂』

の八正道の解説の部分と照らし合わせながら、心の動きを正しく把握し、反省の資料とされたい。